聖書と祈りと伝道

美竹教会
上田光正 著

ある夜のこと、主は幻の中でパウロにこう言われた。「恐れるな。語り続けよ。黙っているな。わたしがあなたと共にいる。だから、あなたを襲って危害を加える者はない。この町には、わたしの民が大勢いるからだ。」パウロは一年六か月の間ここにとどまって、人々に神の言葉を教えた。

（使徒言行録一八章九～一一節）

まえがき

ようやく『美竹文庫』第三巻をお届けすることが出来るようになりました。

第三巻のテーマを何にしようかと、文庫委員会では様々に思案致しました。教団では聖礼典の問題が現下の課題となっている観もあり、そのテーマにしようかとも考えました。しかし、これは結論も明らかな問題であり、これから先五〇年の日本の教会と伝道の計を立てるにあたっては、洗礼の喜びの回復、つまり、伝道する喜びの回復がより先決だ、と考えました。わたしたちが「日本の教会はこれからだ」という気概に燃え、元気で伝道することが出来るためには、どうしたらよいのか、という問題です。その結果、第三巻は「聖書を読んで伝道する教会の建設」を主題にすることとし、上田がこのテーマについて執筆することとなりました。

このテーマは、現在の日本の教会の伝道の不調を何とかしなければならないという問題意識から、この「美竹文庫」を執筆して来られたお二人の先生方を含め、数人の者でこの数年間温めてきたものです。日本の教会のルーツをたずね求めると、やはり、一八四六年にロンドンで成立した「万国福音同盟会」の祈りと働きに行きつきます。「聖書を読み、祈り、伝道する」という言葉は、わたしたちの教会の源流にあった信仰的伝統であり、エートス（精神、品位）であると考えられましょう。そこにもう一度立ち帰ることが、日本の教会が元気になる最大の近道であると信じます。その意味で、この書物が皆様の教会で少しでも生かされ、聖書を読んで伝道する教会の輪が少しでも広げられるなら、そして、日本の教会がもう一度新しく立ち上がる日が来るなら、わたしたちの喜びこれにまさるものはありません。

今日、日本の教会の高齢化の問題が心配されております。教会を支える中堅層の年齢が、六〇代、七〇代となりますと、教会は安定してくる反面、活動力・伝道力がおとろえ、新陳代謝も少なくなります。後継者を育成していない教会の場合には、年々将来のこ

とが心配になります。そのような中で、教会が信仰的に若くなるとは何かを、ご一緒に考えてみる必要があります。教会にお年寄りが沢山来られ、礼拝の前の方の席できちんと礼拝を守っておられるお姿は、それ自身壮観であり、何とも心強いものです。大切であるのは、そのお年寄りの方々も含めて、みなが福音を聴いて元気になっていることです。説教と聖礼典が新しい心を人々に与え、この意味で老若男女が信仰によって若くされているならば、教会は高齢化をうれえる必要はなに一つなくなるはずでありましょう。そのためには、教会を支えている人たちの発想が信仰的に若返り、後継者がそれについて来て、先達の信仰の姿勢を見てはぐくみ育てられるようになることが必要です。

キリスト者はどのように年を取っていったらよいのでしょうか。ひところ、ホイヴェルス神父の「最上の業」という詩が教会の中でよく読まれました。

「この世の最上の業は？
楽しい心で年をとり、
働きたいけれども休み、

しゃべりたいけれども黙り、
失望しそうなときに希望し、従順に平静に、おのれの十字架をになう――
若者が元気いっぱい神の道を歩むのを見てもねたまず――
人のために働くよりも、謙虚に人の世話になり、
弱って、もはや人のために役立たずとも親切で柔和であること――・・・」

（土井健郎、森田明編『ホイヴェルス神父　日本人への贈り物』、春秋社より）

この美しい詩で語られていることも、「信仰的若返り」の一面であると思います。しかし、ともするとわたしたちは、「もう自分は『高齢者』になったのだから、そろそろ隠退だ」と考え、発想が後ろ向きになりがちです。神にも教会にも必要とはされていない、と考え始め、人に迷惑をかけない余生を暮らそうと考えて、「静寂主義」に陥りがちです。そうすると、たちまち生き甲斐を失い、かえって心も体も急速に老化してしまうのです。

「静寂主義」も、「活動主義」も、本書の願いではありません。本書で著者が願いますことは、わたしたちが「神のパートナー」として、神と共に働くことです。そのためにも、

また、伝道力の向上のためにも、後継者の育成のためにも、最も基本的で有効な道は、大変地味ではありますが、やはり、（出来れば教会全体で）「聖書を読み、祈る」生活を再び確立することではないでしょうか。普段聖書を読んでいる信徒は、やはりそれだけのものを持っています。「聖書を読み、祈る」ことにおいて御霊の賜物をいただくなら、真に力ある信徒となるでありましょう。そのような信徒が一人でも多く育てられてゆくことが、これから五〇年先の日本の教会の伝道を考える上で、ぜひとも必要なことではないか、と考える次第です。そのような思いをいだいておりますので、このつたない書物を上梓し、皆様のお役に立ちたい、と考えた次第です。

なお、この美竹文庫は次第に軌道に乗ってきて、初期の目的のとおり、一個教会の業という性格を越えて公共のものとなりつつあります。したがって、いずれは「美竹」文庫の名前も消えるかも知れません。今回は取りあえず、美竹教会内の文庫委員会だけで企画・編集を行うのではなく、より広い視点での文庫の制作を期して、新たに三名の先生方を「教会外委員」としてお迎えいたしました。

ご芳名は（あいうえお順）、

小泉健先生、近藤勝彦先生、山口隆康先生です。

この文庫を用いて読書会や長老勉強会、修養会などをお開きになっているお知らせや、これから開拓伝道をはじめようとしておられるご様子などをお聞きするたびに、その使命の重大さに身が引き締まる思いが致します。どうか、今後とも、この文庫の発展のためにお祈りください。また、ご意見・ご要望などをお聴かせください。

日本にある諸教会の上に、主の豊かな恵みと平安がありますように。

著者識

二〇〇八年八月三日

内容目次

まえがき　2

第一部　聖書を読もう　11

第一章　聖書を読む生活の確立のために　12
（この章の簡単な要約）　12
第一節　日本の教会のルーツをたずねて　13
第二節　教会形成の「主人公」となる　18
第三節　聖書を読み、祈り、伝道する　24
第四節　聖書を自分で読むことの大切さ　30

第二章　聖書はなぜ神の言と言えるのか　37
（この章の簡単な要約）　37
第一節　聖書の中に、永遠の命に至る神の言葉がある　38
第二節　聖書の中に救いのために必要にして十分な知恵と知識がある　51

第三章　聖書をどのように読んだらよいのか　61
（この章の簡単な要約）　61
第一節　教会の信仰の中で聖書を読む　62
第二節　十字架と復活のキリストと出会う　69
第三節　神の救いの歴史を把握する　76
第四節　教会の信仰告白に導かれて読む　82
第五節　聖書を日常生活の中で読む習慣の確立　87

第二部　祈りをおすすめする二つの説教　93
説教Ⅰ　「『父よ』と祈る喜び」　95
説教Ⅱ　「救いが近づいている」　105

第三部　伝道する信徒となろう　117
（第三部の簡単な要約）　118
第一節　神と共に働く信仰　118
第二節　キリストのみ体なる教会を建てる　126
第三節　伝道につかわされる教会　133
第四節　伝道する教会・伝道する信徒　144

あとがき　156

「美竹文庫」の発刊の辞　158

第一部　聖書を読もう

第一章

聖書を読む生活の確立のために

（この章の簡単な要約）

わたしたち日本のプロテスタント教会にとって、いわば生みの親とも言うべき「万国福音同盟会」の信仰的伝統に立ち帰ることは、自分たちの信仰のルーツに立ち帰ることだと考えられます、第一節は、そこに立ち帰り、もう一度「聖書を読む生活」を確立する必要を訴えています。それはまた、わたしたちの教会がもう一度宗教改革の第三の原理、すなわち、「万人祭司（今日では「全信徒の祭司性」とも言う。カトリックでは「信徒使徒職」と言う）」の原理を回復するために必要なことでもあります。宗教改革は、信徒が聖書を読み、救いの確信を持つようになり、キリストにあって育てられて、教会形成の「主人公」となる運動でもありました（以上第二節）。信徒がそのように育て上げられてゆく最上の方法は、標語的に申しますと、「聖書を読み、祈り、伝道する」ということになりましょう。「聖書を読むこと」と「祈ること」と「伝道すること」の三者は、緊密に一つに結びついて一体となっています（以上第三節）。第四節では、とくに、日曜日だけではなく、週日にも聖書を読む習慣を確立することの大切さについて述べています。

第一節　日本の教会のルーツをたずねて

西暦二〇〇九年は、日本のプロテスタント教会が伝道をはじめて一五〇周年の記念の年です。一体、日本のプロテスタント教会のルーツはどこにあるのでしょうか。その歴史を考えるとき、「万国福音同盟会」（The Evangelical Alliance）から考えることは、今日ではほとんど常識となっているようです。一八四六年、ロンドンで「万国福音同盟会」が結成されました。一五〇年前（一八五九年）に、太平洋の荒波を越えてわたしたちに福音を伝えるためにやって来た最初の宣教師たちは、みなこの同盟会と深いかかわりを持つ宣教

師たちでした。日本伝道は、この同盟会において、とくにその支部であったアメリカの教会において、すでに早くから毎年の初週祈祷会の祈りの課題とされていたのです。その意味において、日本の教会はこの同盟会の永年のあつい祈りによって生まれてきた、と言っても少しも過言ではありません。宣教師たちはその信仰的伝統を強く受けつぎ、それをそのまま日本の教会に持ってきたのです。日本だけでなく、中国、台湾、韓国など、東アジアにある諸教会をも設立し、ほぼ同様の信仰的息吹を吹き込みました。それは、「聖書を読み、祈り、伝道する信仰」です。たとえば、「日本の教会は（聖書を）よく読み、韓国の教会はよく祈り、台湾の教会はよく（讃美を）歌う」と言われてきたのも、みなこの福音同盟会の信仰的伝統を受けついでいるからと言えます。

では、「万国福音同盟会」とはどのようなものだったのでしょうか。簡単にご紹介したいと思います。

一八四六年の八月一九日から九月二日までの約二週間、ロンドンのフリー・メーソンホールで世界中のあらゆる教派の神学者や牧師たち九二二名が集まって、世界伝道のための大きな協議会が開かれました。彼らはかならずしも自分の所属する教会や教派を代表して集まってきたわけではなく、むしろ、自由なキリスト者の資格で参加しましたので、

二〇世紀型のエキュメニカル運動（世界教会運動）とは少しニュアンスを異にしますが、目に見えない教会の一致を信じる超教派的な運動で、全世界に福音を伝道するための同盟（Alliance）を結成したのです。そのいくつかの特長をあげますと、

(1)　見えない教会の一致を信じる信仰にもとづく超教派主義
(2)　宗教改革的伝統に立った、きわめて正統的な信仰
(3)　世界伝道への強いうながしとそのための伝道協力の強調
(4)　礼拝を守り、聖書を読み、祈る霊的生活の強調

などがあります。

この同盟会の一つの特長は、右の(1)の超教派性にあります。初代の宣教師たちも、伝道の処女地である日本に主の教会を建てるにあたり、ヨーロッパで生まれた様々な教派的伝統をアメリカ経由で日本に移植することに本当に意義があるかどうかを考えたようです。かえって日本人に反発を招くことも十分に考えられます。むしろ、日本という伝道途上国に建てられる伝道教会が、独自の伝道上の必要性から礼拝や信仰告白や職制を考え、伝道協力の在り方を模索してゆくことこそ大事であると考えました。そして、信徒が聖書をよく読み、目を覚まし、絶えず祈ることをとおして、キリストのご支配が教会の中に確立さ

れ、伝道が進展してゆくことが理想であると考えたようです。

当然それは、教派的伝統ではなく、右の(2)の宗教改革的伝統に立ち帰り、信仰告白もいわゆる「簡易信条」の立場に立ちます。これを「公会主義」と呼びます。そして、伝道を重んじ（右の(3)参照）、信徒の敬虔な生活の育成を大事にしました（右の(4)参照）。

初代の宣教師たちはこの公会主義によって日本に教会を建てようと考え、その取り決めまでしました（一八七二年）。教会のことをわざわざ「公会」と呼ぶようになったのも、その一つの現れです。例えば、アメリカの会衆派教会（日本で言う組合教会）との結びつきの強い関西の諸教会でさえ、みな最初は「公会」という名前で呼ばれていました。「梅本町公会」（現在の大阪教会）、「摂津第一基督公会」（現在の神戸教会）などがそうです。そして、日本のキリスト者たちも、ずっとこの公会主義を理想と考えてきたのです。

その後、明治六年（一八七三年）に「切支丹禁止令」が廃止されるようになると、日本にも様々な教派的な伝統をになう宣教師たちが入り込み、本国の教会と緊密に結びついた教派的な教会を建設しました。それによって、日本教会史が豊かになった一面は否定する必要がありません。しかし、今日における日本の教会の危機的な状況を考え、それをどのようにして克服していったらよいかを考えますときには、もう一度外国で成立した諸教派の純粋な伝統に立ち帰ることが現実的であるようには必ずしも思えません。それは伝道協力上から言っても、あまり賢明であるとは言えないでありましょう。むしろ、あの最初の宣教師たちがもたらした公会主義の在り方に立ち帰り、それと共に、特にこの福音同盟会に流れていた右の(3)の世界伝道への情熱と、(4)の信仰的実践のパイエティ（敬虔さ）とを再び回復することこそが、まさに自分たちの信仰のルーツに立ち帰ることであり、大変有意義なことであると思われるのです。

わたしたちはあの宣教師たちの信仰によって産み落とされ、育てられ、伝道への情熱も、信仰的実践へのパイエティ（敬虔さ）も、いわば骨の髄までたたき込まれたはずでありながら、今そのことをすっかり忘れてしまっているのです。とくに、わたしたち日本基督教団の諸教会は、長い間の紛争によってそのことをすっかり忘れてしまっているのです。これは由々しきことではないでしょうか。

第二節　教会形成の「主人公」となる

本書でとくに中心的に述べてみたいことは、第(4)点の、「礼拝を守り、聖書を読み、祈る生活の確立」についてです。しかし、その前に、上の第(1)点から第(4)点までのすべてに共通する、いわばその根底にある、「万人祭司」の考え方について、ひとこと申し上げておく必要があります。

「万人祭司」とは、平たく言えば、全ての信徒が立ち上がり、教会形成と伝道の本来の主人公となるべきである、という考え方です。教会の主は、もちろん、ただ一人のお方、イエス・キリストだけです。しかし、信徒一人一人は決して教会の中で「お客さん」ではなく、自分の教会を自主的に形成する「主人公」なのです。一人一人はそのように愛にあって造り上げられ、「頭であるキリストに向かって成長する」（エフェソの信徒への手紙四章一五節）ことが求められています。また、そのために訓練される必要があります。使徒パウロも、「兄弟たち、物の判断については子供となってはいけません。悪事については幼子となり、物の判断については大人になってください」（コリントの信徒への手紙一、一四章二〇節）と言っています。信徒一人一人は教会を形成し、互いに仕え合い、証や伝道へとつかわされている福音の「証人」であり、「伝道者」、「使徒」なのです。

この万人祭司の理想を実現するために、第(4)点が必要である、と考えられます。

御承知のように、「万人祭司」の原則をとなえたのは宗教改革者のマルティン・ルターでした。ジャン・カルヴァンも基本的にはこれに賛成し、「教会訓練」を非常に重視しました。したがってこれは、宗教改革の二大原理、すなわち、「ただ信仰のみによって」と「ただ聖書のみによって」に加えて数えられる、第三の原理とも言われます。ルターはペトロの第一の手紙二章五節以下の御言葉などにより、いわゆる「平信徒」と「祭司」という位階的区別は全くなく、どのキリスト者も、洗礼を受けると同時に祭司の「召命」を受け、必要な聖霊の賜物を受けてその職に任じられている、と考えました（洗礼の時にすべてのキリスト者が受ける「召命」とは異なり、説教と聖礼典の執行を主から委託された教職の特別の召命は「第二の召命」と呼ばれます）。「聖霊の賜物を受けている」とは、信徒もまた、聖書を自分の力で読んで理解する力や、教説の誤りや異端説を見抜く力、福音を宣べ伝える力、等々の霊的な賜物を与えられている、ということです。ルターは特に、この原理はすべての信徒が伝道の務めをになうためにこそ重要である、と考えていました

（ペトロの第一の手紙二章九節参照）。

しかし、ルター派教会の中には、この本来の目的を十分に理解せず、反対に、教職と一般信徒との神の前での平等ばかりを強調し、職務の違いや職制を無視する一群の人々が現れました。それがついには農民戦争などの混乱を引き起こす遠因となったため、晩年のルターはあまり「万人祭司」を強調しなくなりました。しかし、「ただ聖書のみによって」を主張し、ローマ教皇の至上権を否定した宗教改革にとっては、この原理はどうしても欠かすことの出来ないものなのです。つまり、万人祭司主義は、教会が活性化し、伝道が盛んになるためには、是非とも積極的に生かされなければならない重要な原理だったのです。今日では、プロテスタント教会でこの原理があいまいにされ、かえって、ローマ・カトリック教会の方でこの考え方が強調されているのは、まことに皮肉なことです。

万人祭司の考え方は、三つの面から強調される必要があります。

第一に、わたしたちは「キリストの祭司」です。「信徒は献金を持って礼拝に来ればそれでよいのだ」と言った牧師がいます。その人は信徒が自分に都合のよいようになってくれることを願っていたため、教会は次第にすたれてゆきました。では、牧師ではなく、キリストに喜ばれる祭司（信徒）となるとは、どのようなことなのでしょうか。使徒ペトロは、

「この主のもとに来なさい。主は、人々からは見捨てられたのですが、神によっては選ばれた、尊い、生きた石なのです。あなたがた自身も生きた石として用いられ、霊的な家に造り上げられるようにしなさい。そして聖なる祭司となって神に喜ばれる霊的ないけにえを、イエス・キリストを通して献げなさい」

とすすめています（ペトロの第一の手紙二章四〜五節）。ここでは、「霊的な家」である教会に「組み入れられ」、「造り上げられる」ことが強調されています。自分の身を「霊的ないけにえ」として自主的に主に献げ、「神の家」へと建てられるのです。そのようにして、一人一人が「生きた石」であるキリストと生命的につながるようになれば、一人一人もまた「生きた石」とされましょう。この考え方からすれば、一人一人にとって、自分の真の家は教会である、と言うことができます。教会という「神の家」からつかわされて自分の家・職場・学校・地域社会等々へ出てゆき、日曜日には再び自分の家である教会へ帰る、という考え方が可能となります。教会が自分の真の家であるということは、教会にいわゆる「入りびたり」になることとは違います。しかし、平均的な日本のクリスチャンは、自分の家庭こそが自分の家であり、そこから教会へ「行く」のだ、と自然的に考えております。これはかならずしも自明のことではないのです。むしろ、わたしたちは「キリ

ストのもの」であり、そのみ体なる教会の肢体です。共に礼拝共同体を形成し、さらには、教会のために祈り、積極的に時間と労力と財力をささげて教会に奉仕する者となりたいものです。

第二に、一人一人は教会の兄弟姉妹に仕える祭司です。だれも他者を支配する支配者ではありません。ところが、教会の中でこの「支配者となる」という誘惑ほど、危険かつ有害で、しかも魅惑的なものはありません。その意味で、牧師も、長老たちも、教会内の「有力信徒」たちも、この誘惑を絶えずみずからに警戒しなければなりません。主はむしろ、「あなたがたの中で偉くなりたい者は、皆に仕える者になり」なさい、と教えられました（マルコによる福音書一〇章四三節）。わたしたちは、互いに仕え合い、祈り合い、慰め合い、戒め合い、訪ね合い、お互いの魂の救いのために配慮し合うべきなのです。このような考え方を、「相互牧会」と申します。牧会のことは牧師の責任で、信徒同士はお互いに無関心でよい、というのではないのです。ちなみに、ルターの宗教改革は「牧会改革」でもあった、と言われます。牧会者ルターが行った牧会は、一人一人の魂を「神の顧み」の中にあるものとして見ることでありました。そのようにして、教会が真の意味で「慰めの共同体」となることは、わたしたち一人一人がキリストの祭司となることを通し

て、実現されます(註)。

第三に、一人一人はキリストからこの世に仕える祭司（使徒）としてつかわされています。キリストの香をはなつ者とされています。ですから、わたしたちは主から預かった福音のタラントを決して地中にうずめることなく、むしろ、一人でも多くの隣人に福音の喜びを証することによって、喜びの実を幾倍にもふやすことが出来るのです（マタイによる福音書二五章一四節以下参照）。

日本の教会の信徒一人一人がそこまで成長し、すべての教会においてこの三つのことが生かされるようになったなら、どんなにか素晴らしいことでしょうか。しかし、そのためには、わたしたちは成長しなければなりません。そのために、万国福音同盟会は先にあげた第(4)点を誓い合いました。すなわち、「礼拝を守り、聖書を読み、祈る霊的生活」の励行です（その他に、毎年初週祈祷会を守ること、毎週月曜日の午前中に恵みの座で祈りをささげること、などが誓い合われています）。それは、聖日礼拝を守ることとならんでキリスト者にとって大切なこととされました。また、そこからつかわされた宣教師たちは、これらの精神をわたしたち日本の教会に伝え、植え付けようとしたのです。

本書では、わたしたち日本の教会がもう一度この「初めの思い」に立ち帰るために、

「聖書を読み、祈ること」、そしてそのことをとおして、すべての者が「伝道する信徒となること」について、ご一緒に学びたいと思います。

（註）この点で、大変参考になる手ごろな本は、クリスティアン・メラーの『慰めの共同体・教会』『慰めのほとりの教会』（加藤常昭訳、教文館、二〇〇〇年、二〇〇六年）です。

第三節　聖書を読み、祈り、伝道する

「聖書を読み、祈り、伝道すること」――はじめに、この三つがどのように有機的につながっていて、「一体」とも言うべき関係にあるかを知るために、真ん中にある「祈ること」について、ご一緒に考えてみましょう。

フォーサイスという神学者が言っています。「最悪の罪は祈らないことである。クリスチャンの中に誰の目にも明らかな罪、犯罪、言動の不一致を見ることは実に意外なことであるが、これは祈らない結果であって、祈らないための罰である。神を真剣に求めない者は、神から取り残される」（P・T・フォーサイス、斎藤剛毅訳『祈りの精神』、一九五九年ヨルダン社、一三頁）、と。まことに真実を突いた言葉であると思います。一日のうちわずかでも、神と交わる祈りのひとときを持ちたいとは、すべてのクリスチャンの心からの願いでありましょう。聖書にも、「いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。どんなことにも感謝しなさい。これこそ、キリスト・イエスにおいて、神があなたがたに望んでおられることです」と書いてあります（テサロニケの信徒への手紙一、五章一六～一八節）。しかし、なかなかそのような時が持てないことも事実です。そのためには、ある程度の工夫が求められますが、その前に、まず、祈ることの喜びを知り、祈らざるを得ない気持ちになることが大切です。

では、真実な祈りはどのようにして起こるのでしょうか。わたしたちの祈りが形式に流れたり、心のこもらない決まり文句で終わったりする一つの大きな原因は、御言葉に触発される段階をへていないからではないでしょうか。なぜなら、祈りは自分とは違う世界、自分の「外部」から聞こえてくる神の言葉を聴かないでは、どうしても決まり文句やひとりごとか、あるいは、自分中心の願い事だけの祈りに終始してしまい、心から祈った、という実感がなかなか湧いてこないからです。祈祷会で聖書研究がなされるのはそのためです。御言葉を聴けば、新しい祈りの言葉も与えられましょう。そのためには、自分の家で

祈る場合でも、聖書をひもとくことです。わたしは自分の教会員にいつもおすすめしているのですが、旧約聖書一章、新約聖書一章、そして詩編一編をお読みになって、それから祈れば、必ず祈りの言葉が与えられます。特に詩編は、ひとつひとつがうるわしい信徒の祈りであり、祈りのお手本とも言えます。それは、祈りは聴かれるとの確信に立ち、自分自身のすべてを神に明けわたし、ゆだね切った気持ちで祈っている、いわゆる「魂を注ぎ出した祈り」です。詩人がどんなに自分の心の中の全てを神に打ち明けて祈っているかを知り、わたしたちにもそのような祈りが許されていることを知ることによって、祈りの豊かさと喜びが生まれてくるでありましょう。

ですから、「聖書を読むこと」と、「祈ること」とは、つながった一つの動作だと言えます。日本の教会はその初めの日々において、聖書をひもとき、共に祈り、家でも祈り、信仰を常に新しくされることが、聖日礼拝を守ることと合わせてキリスト者の敬虔の重要な要素とされていました。それは、いわゆる「聖書通読」や「聖書日課」や「家庭礼拝」の励行を含むものであったのです。

次に、「祈ること」と「伝道すること」との間にも、密接なつながりがあります。

なぜなら、祈りにおいて主イエス・キリストとお会いし、親しく交わることによって、自分が支えられ、キリスト者として生かされるだけでなく、直接伝道への熱意とエネルギーが与えられるからです。もちろん、「伝道すること」もまた、「聖書を読んで祈ること」から生ずるだけでなく、礼拝で御言葉を聴くことからも生ずるでしょう。しかし、何十年も礼拝で御言葉を聴いておりながら、一人も求道者を連れてきたことがないとしたら、その人は一体、どんな御言葉の聴き方をしていたのでしょうか。また、どんな祈りをささげていたのでしょうか。御言葉を聴くことから真実な祈りが生まれていなかったとしたら、「わたしに向かって、『主よ、主よ』と言う者が皆、天の国に入るわけではない」（マタイによる福音書七章二一節）と言われた主の厳しいお言葉を深く怖れなければなりません。その人は、聖書を読むことからもう一度はじめる必要があります。

ここでも、わたしたちは一五〇年前の伝統を思い起こす必要があります。

日本ではじめて祖国の伝道のために立ち上がって「バンド（同盟）」を結成したものに、「横浜バンド」（一八七二年）と「熊本バンド」（一八七六年）と「札幌バンド」（一八七七年）があります(註)。これらのバンドは、いずれも熱心に聖書を読み、祈ることから生まれてきています。その中でも特に「横浜バンド」は、まさに万国福音同盟会の初週祈祷会の祈

りの伝統から生まれてきたものです。そのことをここで想起することは、非常に有意義であると思いますので、煩をいとわずに『日本基督教団史』（日本基督教団史編纂委員会編、一九六七年教団出版局、二八頁）の簡潔な記述をご紹介したいと思います。

「それは明治五（一八七二）年正月二日（新暦二月上旬）のことであった。横浜在住の宣教師バラの家塾で英語を学んでいた青年学生たちは、一八四六年ロンドンで結成された『福音同盟』に倣って、一週間の予定で祈祷会を開き、バラ師から使徒行伝第二章の講解を聞いた。それは熱誠あふるる講解であったが、その際初代教会を思わせるような出来事が、聴講者の間に起こった。すなわち、出席者一同の心は燃え、熱烈な祈祷が次々となされ、尽きることなく、一週間の予定が数週間に延ばされ、多くの人が涙をもって祈った」。

この初週祈祷会は数週間では終わらず、その年の八月まで、ほぼ毎日のように続けられたようです。その中から、三月一〇日には押川方義初め九名の者が受洗し、日本基督公会が生まれました。更に本田庸一、熊野雄七、奥野昌綱、そして翌年になると井深梶之助、植村正久らの有力なメンバーたちが次々と加えられていったのです。

このことからも明らかでありますように、日本の教会は文字通り、聖書を読み、祈るこ

との中から生まれました。これは、使徒言行録に記されている多くの教会の成立事情にも比較され得る、非常に著しい事実であると思います。聖書を読み、祈る習慣の回復によって、日本の教会が真に活性化され、「伝道する教会」となることが切に期待されるゆえんなのです。

（註）「横浜バンド」は後の日本最初のプロテスタント教会である日本基督公会を形成しています。「熊本バンド」は熊本洋学校の生徒三五名が熊本城外の花岡山に集まって「奉教趣意書」に署名誓約して生まれたものです。後に同志社英学校に学び、伝道者となって組合教会を作りました。「札幌バンド」はW・S・クラーク博士の感化を受けた内村鑑三、新渡戸稲造、宮部金吾などの学生たちによって作られたもので、メンバーたちが日本社会に甚大な影響を与えるような活躍をしたことは、ご承知のとおりです。

第四節　聖書を自分で読むことの大切さ

わたしたちが信仰を養われ、「聖霊の宮」とされるためには、御言葉を聴くこと、具体的には、教会の礼拝を守り、家庭で聖書を読むことが、最も重要です。

わたしたちはもう一度、直接「万国福音同盟会」から、聖書を読むことの大切さについて学んでおきたいと思います。この同盟会のいわゆる九箇条の「教理的基礎」（The Doctrinal Basis）は、聖書に関して二つのことを述べています。第一点は、聖書の霊感と権威について（第一条参照）です。これはプロテスタントではごく普通のことと言えますが、特長的なのは、第二点（第七条参照）です。そこには、「聖書の解釈に際しては、個人的判断の権利と義務がある」という言葉があります。この言葉は、一方においてはローマ・カトリック教会の教皇主義に対して、他方においては当時のユニテリアニズムに対して、宗教改革的な「聖書原理」の立場を主張したものと言えます(註)。同時にこの第七条は、「万人祭司」の原理を支える重要な原理でもあります。なぜなら、ルターの万人祭司説が成立するためには、すべてのキリスト者にこの聖書を読む権利と義務との双方が認められなければならないからです。特に注目されますのは、申すまでもなく、「権利」よりも「義務」の方でありましょう。なぜなら、義務があるからこそ、権利が認められなければならない理屈だからです。「義務」があると言われるのは、信徒であるわたしたちにも伝道の務めがあるからです。実際、御言葉を通して祈りの中でキリストと出会い、救いの確信を与えられなければ、どうして伝道したいという気持ちが湧いてくるでしょうか。祈りから出てこない伝道も、本当の伝道とは言えません。「聖書を読むこと」と「祈り」と「伝道」とは、一体なのです。

ちなみに、古代教会では「聖書の学校」という言葉がしばしば語られました。この「学校」の教師はただ一人、イエス・キリストだけです。他の全ての者は、司教であれ司祭であれ信徒であれ、みなこの学校の生徒です。そして、すべてのキリスト者は一生涯、この「聖書の学校」で学ばなければならない、と強調されました。したがって、一六世紀になってルターが聖書を母国語に訳し、それが折から発明されたグーテンベルクの印刷機で印刷されて民衆のものとなったことも、プロテスタント教会の中に聖書日課の伝統が生まれてきたことも、宗教改革本来の精神を生かすためのものであっただけでなく、初代教会からのよき伝統の継承であった、と言うことが出来ます。

わたしは洗礼を受けたばかりのころ、古本屋で大きなルター訳の聖書を買いました。教会の講壇用ぐらいの大きくて重い聖書で、あまりにも重いので、教会へは持ってゆけません。あきらかに、家の中のどこかしかるべき部屋の机の真ん中にでも置いて、祭壇のようにしつらえ、家族全員で読むためのものです。その聖書の終わりには、何ページにもわたって、りっぱに装飾されたページがあるのです。家族一人一人の生活と信仰にかかわる大事な事柄が書き記されるためのページです。そのようにして、聖書が家庭生活の中心にあったことがうかがわれます。

一体、わたしたちはなぜ、聖書を自分のものとして読まなければならないのでしょうか。

その根本的な理由については、第二章の叙述を待つ必要があります。結論だけを申しますと、その最大の理由は、聖書は神の言葉であり、読むことによって、そこから絶えず霊的生命を得ることが出来るからです。しかし、ここでは、その予備的考察として、比較的理解しやすい、実際的な理由を述べておきたいと思います。すなわち、それによって、わたしたちの信仰が正されるからだ、という理由です。

聖書にはそのような、言ってみれば、教会やわたしたちの信仰の過ちを正す機能があります。なぜなら、教会もわたしたちも、長い間には、いつの間にか道を誤り、信仰が停滞し、教会らしさやキリスト者らしさをすっかり失ってしまいながら、それに自分では全く気が付かないことが多いからです。日本基督教団の惨状は、まさにそのよい例です。そのような時に、教会やわたしたちを目覚めさせ、正しい道に連れ戻すものが、「正典」としての聖書の一つの重要な役割です。

そのために、聖書は「正典」である、とされます。「正典」とは、「カノーン（ものさし）」という言葉自身の意味から明らかでありますように、信仰の「基準（ものさし）」となる一群の書物（文書）のことを意味します。キリスト教は「正典」を持った宗教、「正典宗教」なのです。すなわち、「正典」と呼ばれる六六巻の文書を、特に「神の言葉」として告白し、それを中心にして教会を形成しています。それは、教会やわたしたちの信仰を正しい道に導くためです。

このことは、裏を返せば、人々が聖書を読まなくなったとき、教会もキリスト者も堕落することを意味します。少し聖書の歴史をひもといてみるだけでも、そのことはあきらかです。旧約の時代には、聖書は民衆の手にはなかったわけですから、民衆の生活が神を離れてしまうのも無理はありませんでした。その度に、預言者がつかわされています。旧約時代に一度だけ、宗教改革と呼ばれるものがありました。「ヨシヤ王の宗教改革」（紀元前

六二二年）です。ヨシヤは非常に敬虔な王です。ある時、神殿の大改築が行われた際に、大祭司ヒルキアが神殿の壁の中から今日「原申命記」と呼ばれる書物を発見しました。これは後に、「申命記」として聖書の中の一巻を為すようになります。列王記下二二章八節以下によりますと、この「原申命記」が発見されたので、書記官によって何時間にも渡って王の前で朗読されました。じっと耳を澄まして聴いていた王は、自分の「衣を裂き」ました（一一節）。自分たちがあまりにも神の御心を離れていたため、神の怒りが全会衆に向かって燃え上がっていると感じ、激しく悔い改めて「衣を裂いた」のです。早速、この時発見された「原申命記」をもとにして、いわゆる「ヨシヤ王の宗教改革」が断行されました。聖書を読むと、悔い改めが起こり、信仰の覚醒が起こります。しかし、この時の宗教改革は、残念ながら、一〇年もしてヨシヤ王が戦死すると頓挫し、人々は再び元の木阿弥となってしまいました。そして、約四半世紀後の紀元前五八七年にバビロニア捕囚の惨事をむかえることとなったのです。

ですから、捕囚から帰った民は、さっそく預言者の書を集め、律法の書を編纂し、懸命になって神の言葉である「旧約正典」の結集を行おうとしました。しかし、その聖書はまだ人々の手の中にはなく、もちろん、日常生活や家庭生活の中にもありません。

主イエスの時代にも、聖書はまだ民衆の手の中にはありません。しかし、人々がいかに神の言葉に親しんでいたかは、例えば申命記六章六節の次の御言葉からも分かります。「今日わたしが命じるこれらの言葉を心に留め、子供たちに繰り返し教え、家に座っているときも道を歩くときも、寝ているときも起きているときも、これを語り聞かせなさい」。「これらの言葉」とは、「聴け、イスラエルよ。我らの神、主は唯一の主である。あなたは心を尽くし、魂を尽くし、力を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい」（申命記六章四〜五節）という、律法の中心とも言うべき御言葉のことです。敬虔なユダヤ教徒たちはこの聖句を書いたものを小さな箱に入れ、自分の額にバンドで止めたり、着物の房に縫い込んだりしていました。常にこの戒めを唱え、生活の隅々で守ろうとしていたのです。

主イエスのご復活後、新約聖書が次々に書かれ、新約正典が次第に結集されてゆきました。しかし、聖書はまだまだ長い間、民衆のものではなかったのです。中世においても同様でした。そのために、教会は非常に堕落していった、と言えます。ようやく、宗教改革となり、折からの印刷術の発明によって聖書が人々の手に渡ったのです。宗教改革運動とは、聖書を信徒が教会でも読み、家庭でも読む運動でもありました。その聖書を、今もう一度、わたしたちのものとしなければなりません。

カール・バルトという神学者は、教会の中には二千年の間、常に様々な怪しい教えや異端の教えがはびこり、悪徳に冒され、それ以上に多くの過ちが犯されてきたし、これからも犯されるけれども、その中に聖書があり、それが開かれ、読まれているかぎり、教会は聖書によっていつも立つべきところに立ち帰ることが出来る、と言っています。

（註）もっとも、この「個人的判断」（Private Judgement）を「私的判断」と訳してしまいますと、それは教会の「公的判断」、すなわち、信仰告白による解釈と対立するものであるかのように誤解されてしまいますが、そのような解釈はこの九箇条全体の精神から言うとやはり誤解であると言わざるを得ません。

第二章

聖書はなぜ神の言と言えるのか

（この章の簡単な要約）

この章の主題は、聖書が神の言葉、すなわち、わたしたちに対する神の語りかけであるという、プロテスタント教会がプロテスタント教会であるためには欠かすことの出来ない原理に関するものです。「人は主の口から出るすべての言葉によって生きる」（申命記八章三節）と言われます。つまり、キリスト教は「言葉の宗教」であり、わたしたちは神の語りかけを聴くことによってだけ、神と交わることが出来ます。聖書の言葉は、この神の語りかけであり、神の言葉です。なぜなら、聖書の真の著者は聖霊でありますから、聖書を聖霊の導きを受けて読むならば、神の言葉、すなわち、聖書が証するイエス・キリストと

出会うことが出来るからです。逆に言えば、聖書の真の著者は聖霊なのですから、聖霊によらなければ、聖書の言葉の霊的な意味はだれにも理解できません（以上第一節）。第二節は、聖書の「完全性」または「十全性」と呼ばれる事柄のご説明です。平たく言えば、正典としての聖書六六巻を正しく読めば、必ず救われる、ということです。

第一節　聖書の中に、永遠の命に至る神の言葉がある

A　次にわたしたちは、いよいよ、聖書を読むことが重要である、ということのもう一つの理由（第一章で述べた理由を成り立たせている、より根本的な理由）について、すなわち、聖書が神の言葉である、ということについて、ご一緒に考えてみたいと思います。

聖書が人間の言葉でもあるということについては、特にご説明は必要ないと思います。「マルコによる福音書」というのは、マルコという人物が書いたからこそそのように呼ばれるわけですし、「ローマの信徒への手紙」の場合には、ちゃんと著者が使徒パウロであると書いてあります（一章一節参照）。もちろん、著者がはっきりしないものや、一部分

が別の著者であるものなどもあります。しかし、だれかある人がいて、その人が書いたからこそその書がこの世に存在するのであって、まさか天から降ってきたわけではないことは、申すまでもありません。したがってまた、聖書が一人の人によって書かれたのではなく、沢山の人によって書かれたものが、後に結集され（集められ）て「旧約聖書」、「新約聖書」となったことも、改めてご説明するまでもありません。

では、このように人間が書いた一群の書物が、どうして「神の言葉」と呼ばれ、また、そのように堅く信じられてきたのでしょうか。このことに関して、昔から言われてきたことが、「聖書の霊感」ということです。それは、聖書自身の中で主張されています。テモテへの手紙二の三章一六節の御言葉です。

「聖書はすべて神の霊の導きの下に書かれ・・・」

とあります。

ちなみに、「日本基督教団信仰告白」でも「旧新約聖書は、神の霊感によりて成り」と告白されています。「神の霊感」という言葉を平たく言えば、「神の御霊の導きの下に書かれた」、ということです。つまり、聖書の〈本来的、第一次的著者〉は神であり、神の御霊である、という信仰が、ここに告白されているのです。神はもちろん、人間の言葉を用

い、人間の言葉を通して人間にお語りになります。しかし、それをお語りになっているのが神であるということは、聖書を書いた人たち（マルコやパウロやイザヤなど）は、みな聖霊に満たされ、聖霊の導きに忠実に従うことによって書いたのであって、単なる〈奉仕的・第二次的著者〉にしか過ぎない、ということを意味します。人間の言葉を用い、それを通してお語りになっているのは神であり、したがって、聖書は神の言葉である、と言えるのです。

このように、聖書には「神の言葉としての性質」（神言性）があります。

もちろん、この考え方を極端まで押し進めてゆきますと、聖書を書いている間、〈人間的著者〉たちは半分意識を失った状態になっていて、完全に聖霊の筆記用具となっていた、という主張にもなりかねません。このような考え方を「逐語霊感説」と申します。一語一語が逐語的に霊感を受けており、そのまま絶対に誤りのない神の言葉である、という考え方です。普通はそのようには考えず、むしろ、聖書の著者たちは聖霊を受けているときに最高度に意識が鮮明であり、自分が何を書いているかがはっきり分かっている状態で、聖霊が示される福音の真理を懸命に自分自身の言葉で書き表そうとした、と考えます。このように考えれば、一字一句がすべて絶対に誤りのない神の言葉である、という考え方にしばられる必要はありません。しかも、あるまとまった箇所全体で語られていることがらは、神の語りかけ、すなわち、福音の真理そのものであるということになります。

逐語霊感説の考え方では、聖書のもう一つの側面、すなわち、その「人間の言葉としての性質」（人言性）が見失われてしまいます。一言一句がそのまま絶対に誤りのない神の言葉であるとすると、聖書の中のお互いに矛盾する語句の説明が付かず、すべては終末にならないと分からないことになり、真面目に聖書を読む意味がなくなります。あるいは、教師の勝手な解釈を「ご無理ごもっとも」と有り難がることになってしまいます。実は、神は聖書を用いてストレートに人間に語っているのではなくて、人間の言葉を用いて語っているわけですから、聖書の言葉はどんなにやさしい、分かり切った言葉でも、それは〈ある時・ある所で・ある人々に〉語られた言葉であるので、必ず〈今・ここで・わたしたちにとっては〉何を意味するかが正しく（つまり、御霊によって）解釈されなければ、その本当の意味は分からないのです。

このように、聖書の言葉には、常に「神の言葉としての性質」と「人間の言葉としての性質」の二つの側面があります。

「人言性」の側面から言えば、聖書は人間の言葉で書かれていますから、様々な研究や解釈の対象となることが出来ます。しかし、聖書の真の著者は聖霊でありますから、聖書

は御霊に導かれて読まれなければ、幾ら読んでも単なる死んだ文字でしかありません。「文字は殺しますが、霊は生かします」（コリントの信徒への手紙二、三章六節）とありますように、死んだ文字は人を生かすことは出来ないのです。しかし、甦りの主の御霊の導きによって読むならば、たちまちどんなに小さな御言葉からも、永遠の命の泉が湧き出てきます。そして、聖書がまことに神の霊感を受けた神の言葉である、と告白せざるを得ないところにまで導かれます。

では、なぜそのようなことが起こるのでしょうか。主イエスは次のようにおっしゃっています。「あなたたちは聖書の中に永遠の命があると考えて、聖書を研究している。ところが、聖書はわたしについて証しをするものだ」（ヨハネによる福音書五章三九節）、と。これは、ファリサイ派の人々が聖書（この場合は、旧約聖書）の中に永遠の命の言葉があると考えて一生懸命研究していることに対してお語りになった言葉です。主は、聖書の中に永遠の命があることはそのとおりだが、それは、聖書がイエス・キリストを証しているからだ、と言われたのです（それだのに、イエスに来ようともしないファリサイ派の人々が叱られています）。言いかえれば、聖書を読むことを通して、わたしたちはイエス・キリストと出会うことが出来るので、命を得ることが出来るのです。

B　このことを最もよく示しているのが、あのエマオ途上の弟子たちの話でありましょう（ルカによる福音書二四章一三節以下参照）。

それは、主が復活された日の夕方のことでした。二人の弟子たちが、エルサレムから一三キロほど離れているエマオの村へ向かって旅をしながら、イエスについて語り合っていました（一四節）。彼らはイエスが復活したという報せを受け取りながら、とうていそのようなことは信じることが出来なかったので、もはやエルサレムに居ても仕方がないと考えて、故郷に帰ろうとしていたのです。彼らの将来への夢と理想は、主の十字架の死によって無惨にもついえ去りました。彼らは、自分たちの前に立ちはだかった「虚しさ」という巨大な壁を乗り越えることが出来ません。そして、もはや都にとどまる意味はない、と思ったのでありましょう。さっさと荷物をまとめ、再び古い生活に戻りかけていたのです。

ところが、甦りの主が、そのような彼らに近づかれ、彼らと歩みを共にされた、と言うのです（一五節）。

これは、わたしたちが聖書を読もうとして聖書に向かっている状態にたとえることが出来ましょう。わたしたちが聖書を開いて読もうとするとき、復活の主は、あのエマオ途上

の弟子たちと歩みを共にしてくださったように、いつもわたしたちのそば近くにまで来て、聖書の意味を解き明かそうとしてくださるのです。

しかし、その時の弟子たちは、目がさえぎられていたため、それがイエスだとは気付きませんでした。わたしたちがどんなに一生懸命聖書を読んだからと言って、それほど簡単に復活の主と出会うことが出来ないのと同じです。

「何の話をしているのか」と主がお尋ねになりますと、彼らは思わず立ち止まり、後ろを振り返り、「暗い顔をした」、と書いてあります（一七節）。彼らはこの見ず知らずの人の前で、思わず自分たちの素顔を見せ、本心をさらけ出してしまったのです。主の御復活を信じられないでいる人の心の中は、もしその中をそっとのぞくことが出来たなら、多分、やはりこの時の彼らのように、暗いものであったに違いありません。

わたしは一人の神学生で、学びの途中で信仰を失ってしまった人のことを知っています。その理由はお話しすると長くなりますが、当時、神学校が学生運動で大変荒廃していて、それが彼の心の中にまで及んだことも、一つの大きな原因だったようです。彼はある時から次第に、主イエスの御復活が信じられなくなりました。そして、ある晩のこと、彼は突如として、どうしても祈れなくなったのです。彼はのたうち回り、苦しみました。しかし、どんなに祈ろうとしても、もう昔のようには祈ることが出来ません。一夜を泣いて明かした、としみじみとわたしに語りました。もちろん、わたしの説得はもう何の役にも立ちません。かつて復活を信ずる喜びに生きていた者が、それを奪い去られるということは、どんなにかつらいことだろうか、とわたしはつくづく思ったことでした。

イエスは二人の弟子たちに、「歩きながら語り合っているその話は何のことか」とおたずねになります。彼らが「ナザレのイエスのことです」と言って、復活を信じられない自分たちが直面している悩みのことを、率直に打ち明けます。すると主は、いつになく激しく、大変きついお言葉で、弟子たちの不信仰を責められたのです。「ああ、物わかりが悪く、心が鈍く、預言者たちの言ったこと全てを信じられない者たち、メシアはこういう苦しみを受けて、栄光に入るはずではなかったのか」（二六節）、と。優しさの中にも、厳しさがありました。主は彼らがあまりにも早くエルサレムの仲間たちを捨ててしまったことを責められたのです。そして主は、聖書の初めから終わりまで、つまり、創世記の第一ページからマラキ書の最後までに何が書いてあるかを、実に三時間もの間、じゅんじゅんと説き続けられたのです。

弟子たちはこの時の不思議な体験を、いつまでも忘れることが出来ません。その時の感

慨を、彼らは三二節で次のように述懐しています。

「道で話しておられるとき、また聖書を説明してくださったとき、わたしたちの心は燃えていたではないか」

彼らは心が次第に温かく、やがてほのぼのとした喜びに熱くなってくるのを感じていたのです。それは、死んだ人に次第に命の息が吹き込まれてゆくさまにも等しいものだったのでありましょう。聖書の御言葉がわたしたちの心の扉を開き、語り始めたときの、あのえも言えぬ不思議な気持ちを味わったのです。それは彼らが、まだ十分に自覚はしていないながらも、「メシアは苦しみを受け、栄光に入るはずだ」という、この「はずだ」（これは「必ずそうならなければならない［神的必然］」を意味する言葉です）ということを認識したからです。

しかし、まだ現実に復活のイエスと出会ったという自覚はありません。聖書に導かれて、キリストは必ず苦難を受け、復活しなければならない、というところまでは確信出来ましたが、そのキリストが、今、自分たちと歩みを共にされ、親しく御言葉を語っておられる御方その人である、というところまでは、認識できなかったのです。わたしたちが聖書の字づらを読むだけでは、わたしたちはせいぜいのところ、「これが真理であるはずだ」

というところまでしか行きません。「これこそ真理だ」と確信するための最後の一押しは、やはり、祈って主御自身の御霊の助けを得るより他に道はないのです。

三時間はアッという間に過ぎ去り、いつしかエマオの村に到着してしまいました。そこで復活の主は、弟子たち自身の方から、信仰を願い求める心をお与えになりました。彼らはイエスを「無理に引き留めた」、と書いてあります。「一緒にお泊まりください。そろそろ夕方になりますし、もう日も傾いていますから」（二九節）。彼らは先ほどの話の続きを、もっと詳しく聴いてみたいと願ったのです。聖書の御言葉の霊的な意味が分かることは、決して容易ではありません。一般信徒にとっても、そして説教者にとってもそうですが、何よりも、主イエス御自身にとって、それは大変なご苦労です。わたしたちのような物分かりの悪い者に近づき、全てを分からせて下さるためには、主はエルサレムからエマオまでの三時間では足りず、更に彼らと「共に泊まるため」、彼らのむさ苦しい家にお入りになる必要があったのです。主はこの二人の弟子たちを深く愛されたのです。

この夜、エマオの食卓で起こったことは、読む者の心を打ちます。みすぼらしい農家の納屋の片隅ですから、多分、薄暗いところだったのでありましょう。そこに粗末な夕食の用意が整えられました。席に着くと、主は食卓からパンをお取りになりました。そして、

先ず父なる神の御名を讃美してからパンを裂き、ちぎって一人一人にお渡しになりました。ポカンとして見ていた弟子たちの前で、まさしく最後の晩餐の時と、そっくり同じ御様子、同じしぐさで、お渡しになったのです。するとたちまち弟子たちの「目が開け」（三一節）、栄光の主が、今、自分たちの真ん前に座っておられる、と知りました。

レンブラントの絵で、この決定的な瞬間を描いた印象的な作品があります。暗い部屋の片隅にある食卓からは、食器類が音を立てて床に落ちます。驚いた二人の弟子たちの内、一人は中空まで飛び上がり、もう一人は自分の椅子を倒して後ずさりしています。その中で、一人復活の主の御栄光に輝いた御顔にだけ、明るい光が当たっている、という絵です。主は今、世界で最初の聖餐式を通して、彼らの信仰の目を開かれたのでした・・・。

このことは、何を意味しているでしょうか。復活の主と出会い、聖書の言葉が神の言葉となり、そこで永遠の命を得るためには、「最後の一押し」が必要です。この一押しとは、教会の礼拝における聖礼典（洗礼式と聖餐式）だ、とも言えましょう。しかし今は、そこまで申す必要はありません。ただ、御霊の助けを祈り求めなければ、人間の力だけでは、聖書の霊的意味は決して分からない、ということだけは、まったく確かなこととなったのではないでしょうか（詳しくは、第三章参照）。

ここまでのところを、もう一度まとめてみます。

① 聖書は「人間の言葉としての性質」を持っています。その意味では、原語をしらべ、辞書を引き、文法書をひもとき、あらゆる方法や手段を用いてその意味を解明しようとすることが許されます。またそれは、わたしたちが固定的な理解や解釈にとらわれないで、聖書本文の持つ豊かさを十分にくみ取るためには、必要なことでもあります。実際、聖書を読んだり研究したりすることは非常に興味深いことです。なぜなら、聖書ほど深く人間の真実な姿を神の啓示の光によって照らし出している書物はなく、それをわたしたちは文脈の流れ、論理の進め方、単語の意味などを丁寧にたどることによって、ますますあきらかにすることが――もし御霊の導きを受けるならば――可能となるからです。

② 同時に、聖書は「神の言葉としての性質」を持っています。なぜなら、それはもともと、神が御霊により、〈人間的著者〉の手を用いて語り、書き記した言葉だからです。御霊はそれらの人間の言葉を用いて、神の命の言葉であるイエス・キリストを証しているのです。

③ 聖書の真の著者は聖霊ですから、読む人も、聖霊によらなければ、その真理を悟るこ

とは出来ません。聖書の表面的意味（字づらの意味）はだれでも読むことができます。しかし、その奥にある霊的意味は、聖霊によらなければ分からないのです。わたしたちが聖書をひもとくとき、復活の主の御霊はわたしたちに近づき、その意味を説き明かしてくださるでありましょう。その場合、わたしたちは一つ一つの御言葉の奥深い意味を理解するために、単に御言葉について黙想するだけでなく、どうしても、御霊の助けを祈る必要があります。「今日に至るまでモーセの書が読まれるときは、いつでも彼らの心には覆いが掛かっています。しかし、主の方に向き直れば、覆いは取り去られます。ここで言う主とは、〝霊〟のことです・・・」とあるとおりです（コリントの信徒への手紙二、三章一五節以下）。

④　ここで予め申し上げておきたいことは、祈りなしに聖書は分からない、ということは、教会生活なしに、聖書は分からない、ということです。事実、どんなに読解力の鋭い文学者でも、思索力の優れた哲学者でも、様々な不思議な体験を持つ宗教家でも、もし教会に来ることを拒み、聖書だけを読もうとするなら、一言半句すら正しく理解することは出来ません。これはよく知られている事実です。その理由は、聖書を読もうとする者に親しく臨んでくださる聖霊が、わたしたちを教会の礼拝へと導いてくださるから

です。この聖霊の導きに従わない人には、聖霊の恵み深い働きは止んでしまうのです。その詳しいご説明は、第三章で致します。

第二節　聖書の中に救いのために必要にして十分な知恵と知識がある

聖書の霊感と並んで大切な事柄は、聖書の完全性（または十全性）と呼ばれる事柄です。それは、先ほど引用したテモテへの手紙二の三章一五節に書いてあります。

「この書物は、キリスト・イエスへの信仰を通して救いに導く知恵を、あなたに与えることができます」

とあります。

「日本基督教団信仰告白」の文章はもっと正確です。「されば聖書は・・・救いにつきて、全き知識をわれらに与ふる神の言にして」とあります。聖書（ここで言う聖書とは、「正典としての聖書」のことです）は救いに至るために、「十分で不足のない知識」を与え

てくれる、という意味です。これが否定されますと、聖書だけ読んでも救われない、ということになります。古今東西の様々な異端説の根はほとんどそこにあります。ですから、「完全性」の信仰は大切です。現在日本に見られる異端としては、エホバの証人があげられますが、その他、アメリカから「兵役」と称して二年間だけ伝道に来るモルモン教も完全な異端です。エホバの証人は独特の訳がほどこされた新約聖書（新世界訳）、モルモン教（末日聖徒イエス・キリスト教会）は「モルモン教典」（今日では「モルモン書」と言うようです）を持っています。しかし、すぐにお分かりになりますように、聖書の他に他のものを並べたり、聖書を他のもので解説したりすると、その「他のもの」の方が聖書より上になり、聖書はどうでもよい、ということになってしまうのです。

では、正典としての聖書はそれだけで、どのような意味でわたしたちの救いに対して十分な真理（知恵と知識）を啓示している、と言えるのでしょうか。

旧約正典が正式に制定されたのは、紀元九〇年、新約正典は紀元三九七年です（但し、このときの旧約正典表の中にはカトリック教会が「第二正典」と呼んでいるものの一部も含まれています。プロテスタント教会でこの第二正典が除外されて、ほぼ完全な意味で正典が確立されたのは、意外にもおそく、一八二七年に英国聖書協会が大部分の欽定訳から

正式に第二正典を除外する決断をしたときからであると言えます）。

この中で、特に新約正典の成立について考えてみましょう。

「新約正典」が「新約正典」として制定されたのは、もちろん、教会の手によってです。しかし、ただ今「制定」と申しましたが、聖書と教会との上下関係から言えば、もちろん、聖書の方が上です。教会は神の言葉である聖書を自分よりも上にある権威として、御言葉から生まれたわけですから、聖書を自分よりも上にあるものと考えなければなりません。使徒（と旧約の預言者）の言葉から、代々の教会が生まれたのです。ですから、「制定」の前に「告白」がなければなりません。つまり、「教会は聖書を神の言葉として信ずる信仰を告白し、正典として制定した」、と言うべきでありましょう。

しかし、そこに教会の手による取捨選択があったことも、否定は出来ません。つまり、沢山の権威ある文書が書かれ、それらが教会の礼拝の中で朗読されたり個人的に読まれたりしている間に、幾世紀にわたる教会の迫害・背教・試錬・戦い等々の信仰的体験を通して各々の書の値打ちが吟味され、使徒性（著者が使徒であるということ）において疑わしいものやキリスト証言性（キリストが正しく証しされているということ）において質が劣るもの、異端思想に浸食されているものなどが淘汰され、取捨選択されてゆく中で、次第

に正典となるべきものの輪郭（りんかく）があきらかになってきた、と言えます。第二世紀の終わり頃には、正典の輪郭（りんかく）はほぼ定まっていました。その際、一三のパウロ書簡と四つの福音書が二本の太い柱となって、その周囲に他のものが加えられたり取り去られたりしてきた、と言って差し支えありません。また、様々な外的要因が古代教会の「正典結集」をうながすファクターとして働いたことも事実です。例えば、一～二世紀の教会をおおい尽くさんばかりとなったグノーシス運動や、二世紀のモンタノス運動などの異端から身を守るために、教会は多数のグノーシス文書を正典の範囲から〈除外する〉必要に迫られました。反対に、二世紀半ばにマルキオンが余りに狭い正典を作成したことから教会を守るために、正典の範囲を〈拡大する〉必要も生じました。このように、いくつかの段階を経て、内容的にも（すなわち、キリスト証言性の質の高さの観点からも）形式的にも（すなわち、使徒性の有無の観点からも）整えられて、最終的に三九七年のカルタゴの教会会議において正式に聖書正典が「告白」され、「制定」されたのです。

取捨選択が行われた以上、当然そこには正典から外されて「外典」や「偽典」に入れられたものもあるわけです[註1]。例えば、福音書で言えば、マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネの四つだけが割と早くから使徒的権威のある書物として評価が確定し、読まれてきました

が、その他にも、「ペトロ福音書」「トマス福音書」「ユダ福音書」「ニコデモ福音書」「ヤコブ原福音書」など、「正典」に入れられなかったものが多数あります。今日これらのものを読めば、キリスト証言性などいくつかの基準から見て、四福音書との間には天地雲泥の差があります。わたしたちが古代教会の判断の正しさを再確認することは比較的容易です。

しかし、いくらわたしたちから見て「内容が優れている」という判断が下されたとしても、ただそれだけであるなら、完全性を論証する何の根拠にもなりません。では、正典が救いのために「完全である」と告白できるのは、なぜなのでしょうか。

ここでわたしたちは、聖書の「畏敬の念を起こさせる力」について語る必要があります。聖書の「畏敬の念を起こさせる力」とは、わたしたちが聖書を一生懸命読んだときに、あるところで、急に聖書の言葉が激しくわたしたちの心に迫り、ついにわたしたちに深い畏敬と神への帰依の念を激しく喚起する力のことです。あの、エマオの弟子たちの心に燃えるような思いを起こさせた力のことです。これはいわば、「聖書の実力」とも言えましょう。正典に入れられた書物は、いずれもこの「畏敬の念を起こさせる力」を持っているのです。従って、教会は自分勝手な判断によってではなく、この「畏敬の念を起こさ

せる力」を認識して、正典への信仰を告白し、それを制定したのです。

そうであるとするならば、教会が聖書正典を告白・制定したことの背後には、教会の信仰を正しく導いて正典結集にまで至らせてくださった聖霊なる神の主導的な導きがあった、と言うことが出来ます。別の言い方をすれば、聖霊は聖書各書の〈本来的・第一次的著者〉であられただけでなく、同時に、聖書正典の真の編纂者でもあられた、と言うことが出来ます。この信仰が、正典信仰、または、十全性の信仰です。なお、わたしたちが前章の第四節で、聖書が教会とキリスト者の信仰の過ちを正す機能がある、と述べたことは、このことと深い関わりがあります。

全く同じことが、旧約聖書についても言えます。

ただし、旧約聖書の場合には、それ以外にもいくつかのことを申し上げておく必要があります。まず知っておかなければならないことは、旧約聖書が正典として制定されたのは、ようやく紀元後九〇年のヤムニヤの会議においてであった、ということです。しかもこれは、ユダヤ教の側の会議だったのです。それまで、ユダヤ教においては、旧約諸書は正式な「正典」としてではなく、ただ完全に権威ある「神の言葉」として――それはモーセ五書を内容とする「律法」と、歴史書や預言書を内容とする「預言者」と、詩編や箴言

などの「諸書」とによって構成されていましたが――、神殿やユダヤ教会堂（シナゴーグ）の礼拝で読まれていました。

そして、全く同一のものが、キリスト教会の礼拝においても読まれていました。なぜなら、主イエス御自身、「聖書はわたしについて証しをしている」（ヨハネによる福音書五章三九節）と言われ、旧約聖書の御言葉（例えば、イザヤ書五三章など）を通して父なる神の御声を聴き、御受難されたからです。初代教会もまた、旧約聖書に証されてイエスを救い主・キリストと信じ、告白し、伝道しました。ですから、まだ新約聖書が一冊も書かれていない時代において、教会が「神の言」「聖書」と考えていたものは、まさしく旧約聖書に他ならなかったのです。新約聖書の著者たちも、みな旧約聖書を神の言葉として信じ、その前提で書いています。

ですから、教会は三九七年の教会会議において、ユダヤ教側が「聖書正典」として制定したものを、そのまま教会の「旧約正典」として告白し、制定しています。今日から見れば安易なように見えるかも知れませんが、決してそうではなく、むしろ、全く当然のことだったのです。

ですから、「旧約聖書も読まなければいけないのでしょうか」、という疑問に対する答

は、やはり、「読まなければいけない」となるでしょう。なぜなら、新約聖書だけでは、やはり実際上、異端信仰が生まれてきてしまうからです。古代のマルキオンの異端などは、その典型でありましょう。マルキオンという人は、旧約聖書の神様は怒りの神様で、残酷なこともお命じになる、イエスが啓示された新約の神様こそは愛の神様であるから、旧約聖書は読まない方がよい、と考えて、ルカによる福音書とパウロ書簡とだけから成る「マルキオンの正典」というものを作り、独自の教会と祭司制まで作り上げました。一時はキリスト教会に対抗するような勢力を誇りましたが、結局滅びてしまいました。

このように、正典が違えば、信仰も違ってきてしまいます。だから、正典は大事なのです。「正典などどうでもよい」などと言っている教師は全く信用できません。

旧約聖書がわたしたちの信仰にとって必要であることは、全くあきらかです。なぜなら、旧約聖書は主イエス・キリストのご降誕を預言し、新約聖書はその成就を証しています。旧約聖書が述べていること（預言）と新約聖書が述べていること（成就）とは、少しも矛盾していないのです。ですから、審きの神（旧約の神）と救いの神（新約の神）は同じ神です。旧約の信仰者たちと新約の信仰者たちとは、同じ神を信じ、同じ罪の赦しを信じ、同じ信仰に立っていました。もし旧約聖書が聖書でなくなると、イエス・キリストの

十字架が罪に対する神の怒りと審きであるという面がまったく不明瞭になります。神の選びの自由もはっきりしなくなります。創造も摂理も終末も分からなくなります。特に、神の救いの御計画と実行、つまり、「救済史」というものが、全く分からなくなってしまいます。そうすると、すべてが分からなくなるのです。

反対に、旧約聖書だけで、新約聖書がないならば、旧約聖書の全ての言葉は実に謎に満ちたものとなってしまいます。なぜなら、旧約聖書はそれ自体だけで読めば、決して単純に主イエス・キリストに対する預言一色ではありません。その他のことも沢山言っていますし、これらを全てキリスト中心的に解釈しなければならないかどうかは、必ずしも自明ではありません。ですから、新約聖書が書かれる必要があったのです（新約聖書を認めないユダヤ教は、未だにメシアの到来を待っています。ですから、「その熱心さは正しい認識に基づくものではなく」［ローマの信徒への手紙一〇章二節］、救いに至る十分な知恵を持っていない、ということになるのです）。

以上のことから、旧約聖書三九巻と新約聖書二七巻との両方が合わさって、初めて救いに対して十分な知識が啓示されている、と言えます[註2]。

（註1）「正典」に入らなかった「外典」や「偽典」は「正典」とは厳密に区別されます。一般に、正

典に入らないものを「外典」と呼びますが、旧約聖書の場合には、それは一三冊に限定され、他は「偽典」と呼ばれます。（従って、「正典」は「聖典」とは全く意味を異にします。「聖典」は、単に宗教的情操を養う上で有益な宗教書という程度の意味であり、由緒ある宗教書はみな一般に「聖典」と呼ばれます。例えば、仏教にはその意味での「聖典」が一万冊以上もあると言われます。しかし、仏教は「正典」を持っていません。神道も同様です）。

（註2）　ただし、聖書の真の編集者は聖霊である、ということは、決して聖書が天から降ってきた書物である、という意味ではありません。聖書がそのまま天から降ってきたかのような極端な考え方に立ちますと、聖書各書の配列の順序までが聖霊によっている、と受け取られかねません。そして、その順序に深い意義があるように説く人もあるようですが、これは誤りです。と申しますのも、三九七年に可決された正典表は、単にどの書物が正典に入るかということだけを告白・制定しているだけで、配列の順序まで決めたわけではないからです。実際、聖書各書の配列の順序は幾通りかあって、現に、現在の日本聖書協会訳の『聖書』の順序は、三九七年に可決された正典表の順序とは違っています。協会訳聖書は七〇人訳ギリシア語聖書の配列の順序を採用し、創世記からヨハネの黙示録までを、ほぼ救済史の時間順に従って配列しています。そこには深い意味があることは事実ですが、それとは違う配列の順序が現に幾通りか存在する以上、ある一つの配列の順序を絶対視することは出来ないわけです。

第三章

聖書をどのように読んだらよいのか

（この章の簡単な要約）

わたしたちはすでに第二章で、聖書の真の著者は聖霊なる神であるということ、従って、聖書は聖霊に導かれて読むことが正しい、ということを確認しました。本章ではまず、聖霊に導かれて読むとは、教会の信仰の中で、すなわち、教会の信仰に証しされて読むことである、ということを明らかにしたいと思います。（以上第一節）。では、教会の信仰の中で、それに証しされて読む時、聖書はどのように読むべきなのでしょうか。それは、まず第一に、聖書の「中心」である、十字架と復活のキリストと出会うように読むべきである、ということを意味します（以上第二節）。

次に第二に、聖書の「全体」である、神の救いの歴史（「救済史」）を正しく把握しながら読むべきである、ということを意味します（第三節）。

更に第三に、その「骨格」を述べている、教会の信仰告白に導かれて読むべきである、ということを意味します（第四節）。

最後の第五節は、皆様が実際に聖書をお読みになるようになるためのおすすめです。

第一節　教会の信仰の中で聖書を読む

前章でわたしたちは、旧新約聖書が神の霊感によって書かれたものであり、救われるために必要かつ十分な知恵と知識とをすべて含んだ書物であることを学びました。それは、わたしたちキリスト者の信仰と生活がこの聖書によって形づくられることによって、永遠の救いにいたることが出来る、ということを意味します。その意味で、聖書は信仰と生活、すなわち、キリスト教の教理と倫理との誤りのない規範である、と言われるのです。

ところで、わたしたちが聖書に導かれて信仰を与えられ、信仰生活や日常生活を形づくるためには、聖書を正しく読み、解釈しなければなりません。では、聖書はどのように読み、解釈したらよいのでしょうか。

聖書の読み方と言っても、別に難しいものがあるわけではなく、聖書はただ読めばよいのです。たとい初めは難解であっても、「読書百遍義自ずから見る（あらわ）」ということわざもあります。しかし、このように申しましても、間違った読み方もあります。例えば、敬虔な信徒たちだけのグループで聖書を読んでいて、いつの間にかその中の指導的人物の信仰だけで聖書が読まれていた、という危険性もあります。その反対に、大学の研究室で全く教会的信仰とは無関係な聖書研究が為されることにも、大きな危険性があります。どちらも同じ程度に危険です。本節ではただ、「聖書は教会の信仰の中で読むべきものだ」ということだけを、明らかにしておきたいと思います。そして、次節以下でさらに詳しく述べてみたいと思います。

聖書はなぜ教会の信仰の中で読まれるべきなのでしょうか。はじめに結論から申し上げますと、その理由は、わたしたちは聖霊の導き、すなわち、聖霊による証を、教会の兄弟姉妹（この中にはもちろん、教職者も含まれています）の証を通してしか、聴くことが出来ないからです。従って聖霊は、わたしたちをキリストの体なる教会へと導き、兄弟姉妹

の証に耳を傾けるように導かれます。そのことを通して聖書の「中心」である生けるキリストと出会わせ、教会が信ずる信仰を得させようとなさるのです。

そもそも、聖書をどう読み、解釈したらよいかという問題は、むずかしく言えば、「解釈学」という一つの立派な学問まで形成してきました。特にヨーロッパでは、すでに一九世紀から、聖書をどのように読んだらよいかという最も中心的な問題に関してだけでなく、もっと一般的に、何か文書として書かれたもの（これを一般に「文献」と呼びます）を理解し、解釈するとはどういうことか、という一般的・哲学的な問題として、様々に議論されてきました。ここではもちろん、そのような一般的・哲学的議論には少しだけ触れることにして、あくまでも、なぜ聖書は教会の信仰の中でしか、正しく読むことが出来ないのか、という問題に焦点をしぼって述べたいと思います。

この問題がややこしい問題ともなりうる理由は、わたしたち人間が何かを読んだり理解したりする場合、「思い込み」という非常にやっかいな問題があるからです。これを解釈学では、「先入見」とか「前理解」と申します（「前理解」とは、ある対象なり文献なりについて「理解する」よりも前に、すでにその対象についてわたしたちが持っている何らかの理解、という意味です）。

わたしたち日本人が聖書を読むときには、普通は二一世紀という、自然科学がいちじるしく発達した時代の世界観や宇宙観を「先入見」として持ち、大なり小なり日本人的心情を持ちながら、読むことになります。あるいはまた、聖書は何を言っているかについても、先入見を持ちやすいのです。それを文学書として読む人もいれば、人類の古典として読む人も、人生訓として、あるいは未来学のテキストとして読む人もいるかも知れません。聖書は膨大ですから、どこをどのように切って読もうとするかによって、様々な読み方が生まれてきます。

早い話が、日常会話においてさえ、わたしたちは非常にしばしば人の話を「思い込み」や「先入見」にもとづいて聞きますから、誤解に満ちた聴き方をします。しかもそのことを自覚していない場合が非常に多いのです。例えば、もしわたしが相手は嘘つきであるとか、何かたくらみを持っているという先入見を持ちながらその人の話を聞いていたら、恐らく五パーセントも正しく理解することはできないでしょう。聖書の場合でも同じです。例えば新約聖書の場合、著者たちはみな、「イエスは復活した」、という根本理解にもとづいて書いています。ところが、それを読む人が「復活などあり得ない」という先入見を持って読んだとしたら、五％はおろか、一％だって理解出来ないでありましょう。そのよ

うな人は、パウロのように、「目からうろこが落ちる」（使徒言行録九章一八節）体験をしなければ、聖書の真意が分かりません。

そこで、解釈学は長い間、このような「先入見」（前理解）をどうしたら取り除くことが出来るか、という問題と取り組んできました。人の話をまっさらな心で聴き、書かれた文献が語ろうとしている事柄をその著者が理解しているとおりに、いやむしろ、著者以上によく理解し、解釈したり説明したりするためには、どうしたらよいのか、という問題です。そしてそれは、単にパウロならパウロが言っていることを正しく理解すればよいわけではありません。むしろ、パウロの言葉を通して、聖書の真の著者であられる聖霊がハッキリと指し示しているお方、すなわち、イエス・キリストご自身とお会いし、そのお方を正しく知るようになることが、聖書を読む究極の目標であることは申すまでもありません。そのためには、もちろん、「聖霊の導きを祈りながら読むより他にない」のです。それは全くそのとおりなのですが、それでは、「聖霊の導きを祈りながら読む」とは、一体どのような読み方をすることなのでしょうか。それが、教会の信仰の中で読む、すなわち、兄弟姉妹の証に耳を傾けて読む、ということなのです。

話をもう一度「先入見」の問題に戻します。解釈学はこの問題に関して、重要な結論を

出しました。その結論の一つは、「先入見（前理解）は決して取り除くことは出来ない」という、いわば否定的・消極的な結論です。なぜなら、およそ人が何かを理解するとき、必ず何らかの先入見（前理解）にもとづいて理解しているからです。何一つ先入見を持たないで何かを理解する、ということは、言葉なしに何かを理解することと同じくらい不可能です。例えば、パウロが「イエスは復活した」と言ったとすると、わたしたちは「復活」という言葉についての何らかの先入見なしに、パウロの言葉を理解することは出来ません。しかし、わたしたちが持っている「復活」という言葉のイメージは、実は、主イエスのご復活とは余程違っているのかも知れないのです。そうすると、その「復活」という言葉にまといつくイメージが邪魔して（つまり、それにつまずいて）、パウロの言葉の理解がさまたげられてしまう、ということが起こり得ます。

しかし、この否定的な結論の裏には、肯定的・積極的な結論も含まれています。すなわち、「より誤解に満ちた先入見を、より誤解の少ない先入見と入れ替えることなら出来る」、という結論です。つまり、今までは「イエスは死んだ」という理解であったのに、パウロの言葉を聴いて、たとい「復活」という言葉で誤ったイメージを抱いていたとしても、そのパウロの言葉を受け入れることによって、「死んだ」の代わりに「復活した」と

いう、より真実に近いイエス理解が得られることになる、とは言えましょう。このようにして、理解がより誤解に満ちたものからより誤解の少ないものへと、あたかもらせん階段を少しずつ降る（または、昇る）ように、少しずつ深められ（または、高められ）て行くならば、限りなく真のイエス・キリスト理解に近づいて行くことは、あり得るでありましょう。

わたしたちは聖書を「教会の信仰の中で」「繰り返し読む」ことを通して、その理解が次第に深められてゆきます。そして、ある時、突如としてパッと視界が開けてくることがあるのです。それは、わたしたちの視座が聖霊によってある高みにまで引き上げられることによって、生けるキリスト御自身とお会いし、永遠の命を頂くという、聖書を読む究極の目標が達成されるときです。ルカによる福音書二四章の「エマオの弟子たち」の話で言えば、単に「心が内に燃える」（三二節）だけでなく、「目が開け、イエスだと分かる」（三一節）という出来事が起こるときです。それは、わたしたちが聖書を読むとき、いつも必ずではありませんが、恵みにより、聖霊によって与えられる体験なのです。

では、そのような時に、わたしたちはどのような聖書の読み方をしているのでしょうか。端的に言えば、それは、教会の信仰の中で、すなわち、教会の信仰に証されて読む読

み方をしている、ということなのです。なぜなら、わたしたちがキリスト者となるのは、自分一人で聖書を読むことによってではなく、必ずそこには母なる教会の信仰の導きがあるからです。「キリスト者は神を父とし、教会を母として生まれる」と教会教父のキプリアーヌスが言っているとおりです。

第二節　十字架と復活のキリストと出会う

このことを、もう少し詳しく述べてみたいと思います。

まず、ここでわたしが申しております「教会の信仰」とは、厳密に言えば、二千年の「聖・一・公同の・使徒的教会」（今後、これを「公同教会」と略称します）の信仰のことであり、必ずしも、現代の教会とか、日本の教会とか、ある教派の教会とか、その中の敬虔な一グループの信仰のことではないということを、あらかじめ申し上げておきます。

とは申せ、具体的に言えば、それはやはり、自分が今通っている教会、と言えましょう。と申しますのも、聖霊がわたしたちに働くとき、わたしたちに親しく「語りかける」

という働き方をなさるからです（エフェソの信徒への手紙六章一七節など参照）。ですから、「兄弟の証」と言っても、それは「顔と顔とを合わせて」親しく語られ、聴かれるような証であることが、ここでは肝要なのです。それは具体的には、自分の出席教会の兄弟姉妹を通して与えられることになります。

以上のことを考え合わせますと、わたしたちが「聖書を教会の信仰の中で読んで生けるキリストと出会う」ということが、最も端的に実現しているものは、日曜日の礼拝の御言葉（説教と聖礼典）においてである、と言えます。すなわち、ここでわたしたちは、聖書の「中心」である、生けるキリスト御自身と出会うことが出来るのです。

なぜなら、礼拝は決してキリスト教講演会のようなものではありません。そこで神の御名があがめられ、讃美されるとき、そこに礼拝共同体としての教会が姿を現します。この礼拝の中で、生けるキリスト御自身によって立てられた説教者が説教をするとき、その説教は、彼自身の個人的な宗教観や人生観を語っているのではありません。キリストのご委託を受けて、御霊の力により、キリスト御自身を証している営みなのです。ですから、説教のことを、聖書という「書き記された神の言葉」に対して、「語られた神の言葉」とさえ呼ぶことがあります。

説教者は説教において、自分に与えられたテキストをあらかじめ何度も繰り返し読んで、自分が聖霊により、公同教会の信仰の中でそのテキストから聴き取った神の言葉を、会衆にも伝わるような言葉を懸命に探し出し、選び出して語ろうとします。その準備のための説教者の苦難は、並々ならぬものがあります。単に気持ちがあればよいという問題ではなく、会衆の中には、その人の人生でたった一度だけ礼拝に来た、という人もいるでありましょう。その人に、今・ここでその「魂」に聖書の「心」を伝えるために、説教の全体の構成や言葉はもちろんのこと、あらゆる細部に至るまで心を配って説教を準備します。そのために、何度も自分の説教をテープで聞きなおす人もいます。それだけの準備をしながら、いざ説教壇に上るときには、説教原稿は持たず、メモだけで上る人もいます。それは、聴衆と「顔と顔とを合わせ」、呼吸をぴったり合わせて語ることが出来るためです。特に、最も重要な説教の語りだしの部分は、口の中で何度もつぶやきながら中味をねるほどの準備を重ね、そのために、説教前の三〜四〇分は、じっと牧師室に閉じこもっているのです。

そのようにして準備を整えた説教者は、公同教会の信仰をおおやけに宣べ伝える者として、聖霊によって親しく語っているのです。その時、「この聖書はわたしについて証をす

るものだ」（ヨハネによる福音書五章三九節）という主の御言葉が、二千年の時の隔たりを越え、今・ここで現実の出来事となるでありましょう。それはまた、その日に与えられた聖書テキストの最もよい講解（すなわち、聖霊御自身による講解）となる、と言えるでありましょう。

従って、例えば、「迷える羊」のたとえ話（ルカによる福音書一五章一〜七節）がテキストであったとします。その説教を聴く聴衆の一人に、もし聖霊が働くなら、その聖書箇所で語られている百匹の中の一匹の羊とは、まさに自分自身に他ならない、キリストはこの迷える自分を訪ねて下さり、今、説教者をとおしてこのわたしに呼びかけてくださったのだ、という出会いの出来事が起こり得るでありましょう。それはまさに、公同教会の信仰に証されて、聖書を通し、キリストと出会うことが出来た、という出来事に他ならないのです。

もう一つの例を挙げれば、「疲れた者、重荷を負う者は、だれでもわたしのもとに来なさい。休ませてあげよう」（マタイによる福音書一一章二八節）という主の御言葉があります。このテキストにもとづく伝道説教を聴いたある求道者が、そこで彼が実際に体験した感想を次のように述べています。「説教をお聴きしている内に、次第にわたしの周囲の

人々も、説教壇も、語っている説教者自身も、一切のものが、わたしの前からどんどん消えてゆくような気がした・・・そして一瞬、だれかが確かに、わたしの肩の上にそっと手を置いてくださった。その瞬間、わたしが今までの人生で背負ってきたすべての重荷や苦労が、わたしの背中からスーッと取り除かれたような気がした。わたしはそのお方の許に、永遠の安息を得ることが出来たのだ・・・」、と。この人もやはり、聖書の御言葉が直接その魂の深みにまで達し、そのとき、「目が開け、イエスだと分かった」（ルカ二四章三一節）という体験をしたのだ、と言うことが出来ましょう。

もちろん、このような経験は、単に求道者だけが新鮮な形で享受するわけではありません。むしろ、信仰生活の長い人ほど、本来ならば、聖日ごとに味わい、聖晩餐に与ることによって、さらに深められ、強められるものです。そのためには、（説教者のために祈ること、等々の他に、）これからお話ししますように、聖書をよく読むことが、一つの大きな助けとなります。

最後に一つだけ申し上げておきたいことは、やはり、聖書を読む究極の目標は、「十字架と復活のキリスト」と出会うことだ、ということです。なぜなら、聖書の「中心」は十

字架と復活のキリストだからです。もちろん、十字架に至るまでのイエス・キリストも大切です。しかし、聖書を読んで単にナザレのイエスと出会う、ということだけであるなら、それは教会の信仰の中で聖書を読んだことにはなりません。生前のイエスのすべての言葉と御業は、十字架を目指しており、十字架においてその頂点に達し、同時に、完成されています。そして、その十字架の意味を父なる神御自身が明らかにしているのが、三日目の死人の中からの甦りです。ですから、パウロはコリントの信徒への手紙一、一五章二節以下で、「あなたがたはこの福音によって救われます・・・最も大切なこととしてわたしがあなたがたに伝えたのは、わたしも受けたものです。すなわち、キリストが、聖書に書いてあるとおりわたしたちの罪のために死んだこと、葬られたこと、また、聖書に書いてあるとおり三日目に復活したこと・・・」と述べているのです。この「キリストがわたしたちの罪のために死んだこと」と「三日目に死人の中から復活したこと」が、文字通り、聖書の「中心」です。

聖書の正しい読み方とは、公同教会の信仰の中で、わたしたちが生けるキリストと出会い、そのキリストの十字架と復活の中に自分自身を見出すようになる、ということでありましょう。すなわち、キリストの十字架の死がわたしのための身代わりの死であり、わたしはそれによって古い自分に死んで新しい自分に生かされたのだ、と知るときに、自分がキリストのものとされたことを知り、神に感謝すると共に、隣人の罪を赦し、隣人を愛する生活を真剣に考えるようになります。その時、わたしたちの信仰は成長します。パウロは「わたしの主キリスト・イエスを知ることのあまりの素晴らしさに、今では他の一切を損失と見ています」（フィリピの信徒への手紙三章八節）と述べた後で、それは、「キリストを得、キリストの内にいる者と認められるためです・・・わたしは、キリストとその復活の力とを知り、その苦しみにあずかって、その死の姿にあやかりながら、何とかして死者の中からの復活に達したいのです」（同八～一一節）、と述べています。また、ガラテヤの信徒への手紙二章二〇節では、「生きているのは、もはやわたしではありません。キリストがわたしの内に生きておられるのです」という言葉も残しています。

「キリストがわたしの内に生きる」ことこそは、わたしたちが聖書を読む究極の目標ではないでしょうか。その時、聖書が「キリスト・イエスへの信仰を通して救いに導く知恵を、あなたに与える」（テモテへの手紙二、三章一五節）書物であることが明らかになります。わたしたちは、キリストによって捕らえられているからこそ、捕らえようとして追い求めるのです。

第三節　神の救いの歴史を把握する

前節に記しましたことは、わたしたちが直接兄弟姉妹の証に接することが出来る中で聖書を読む場合です。しかし、それ以外にも、すなわち、日曜日の礼拝においてだけでなく、自分の家でたった一人でも、わたしたちは「教会の信仰の中で」聖書を読むことは出来ます。ふだん、日曜日の礼拝に出ている人の場合には、そのことが可能です。可能であるだけでなく、そのことは必要でもあります。特にそれは、わたしたちが日曜日の説教を聴いて信徒として育て上げられてゆくために、ぜひとも必要なのです。

この点について、もう少し詳しく申し上げたいと思います。

わたしたちは単に聖書の「中心」を知るだけでは、ともすると、日毎に必要な神の言葉を神からいただく必要性や渇きを次第に感じなくなり、いつの間にか信仰がマンネリ化し、説教を聴く耳もどんどん鈍化してしまいます。その結果はどうなるかと言えば、いばらの地に落ちた種と同じように、信仰の実を結ぶことが出来ず、自分一代で終わる信仰者となるのです。今日の日本の教会の大部分の信徒は、この「いばらの地に落ちた種」になっています。そうならないためには、《日毎に》聖書を読む必要があるのです。

その理由は、聖書がその「中心」であるイエス・キリストを、神の救いのご計画全体の中で語っているからです。従って、聖書の証の構造は、その「全体」があり、「全体」の中で、「中心」であるイエス・キリストのことを語っている、という構造なのです。教会は聖書を「正典」としたとき、信徒が聖書をその「全体」の視野の中で読むことが必要である、と考えました。

では、聖書の「全体」とは何でしょうか。それは、日本訳聖書の配列の順番が一番よくそれを示しているのですが、創世記からヨハネの黙示録までを貫く「救済史」、すなわち、神の救いのご計画とその成就の全歴史が、その全体です。旧約聖書はその中で、天地創造に始まり、主イエス・キリストの御降誕までを預言しています。次に新約聖書は、主イエス・キリストの御降誕に始まり、主の再臨と終末を予告しているヨハネ黙示録で終わっています。この神の救いの歴史の全体が（別の言葉で言えば、キリストにおいて結ばれた神と人との契約の成就が）、聖書の「全体」なのです。

この聖書の「全体」が分からないと、自分が救われた意味も、歴史の中でその救われた自分が果たすべき使命も、従って、自分が生きている意味も、よく分からないまま一生を

過ごすクリスチャンとなってしまいます。反対に、この「全体」がはっきりつかめれば、何が重要であり、今がどのような時代であり、自分たちの教会は今何をしなければならないのか、その中で自分は何をしなければならないのか、これらのことが、次第に明瞭になって来ます。「知る力と見抜く力とを身に着けて、あなたがたの愛がますます豊かになり、本当に重要なことが見分けられるように」（フィリピの信徒への手紙一章九〜一〇節）なるのです。それだけではありません。単に自分の教会の使命が何であるかを知るだけでなく、わたしたちが信徒として更に成長すれば、今がどのような時代であり、その中にある日本の教会に何が必要であり、何をしなければならないか、という「世界」と「全体教会」に関する判断までも出来る信徒となります。そして実は、今の日本の教会にとって、このような意味において、一人一人の信徒が自覚的な信徒として立ち上がることが、最も必要とされているのではないでしょうか。わたしたちがこのような信徒にまで成長するためには、単に日曜日の礼拝に出て受け身で牧師の話を聞いていればよい、とは言えません。神学書を読めばよいわけでも全くありません。聖書を創世記の初めから黙示録の終わりまで、繰り返しまんべんなく何度も読むことが、どうしても必要なのです(註)。第一章第四節で「聖書の学校」について述べたところを、もう一度ご参照ください。

このことは、「聖書正典」についての新しい視点をわたしたちに与えます。

聖書は成立の過程から言えば、各書がそれぞれバラバラに一巻の巻物としてあったものが、あるいは、パピルスや羊皮紙の上に書かれていたものが、後になって一冊の閉じられた書物、「聖書正典」となったものです。とは言え、正典の結集に御霊の主導的な導きがあったという考え方からすれば、この一冊に閉じられた姿が神がキリスト教会に与えた聖書本来の姿である、と言えましょう。つまり、分かりやすい言い方をすれば、御霊は初めから聖書がこのような一冊の書物、「聖書正典」となることを目指して聖書をお書きになった、と考えても差し支えないのです。神はわたしたちに、聖書全巻を通して救済史の全貌を語っておられます。聖書はそのような一冊の書物として、他と区別された「聖なる」書物です。ですから、聖書全体をまんべんなく繰り返し読むことが、必要とされるのです。それはまた、わたしたちが日曜日の礼拝説教をより深く理解するためにも、有益となるでありましょう。そのようにして、真に神と人の前に謙遜であり、かつ、教会を「造り上げる」ことの出来る信徒となることが出来るのです。

なお、ここで一つご注意を申し上げておきたいと思います。聖書が六六巻全部合わせてはじめて聖書という「全体」である、ということは、先ほど申し上げましたように、その

テーマが「神の救済史」だからであります。言ってみれば、それはそのテーマが神の救いであるような一つの大河ドラマなのです。その中心はイエス・キリストの十字架と復活です。と言うことは、聖書は決して「寄せ木細工」のようなものではない、ということを意味します。ひところ、聖書を寄せ木細工のように説明する人がいました。例えば、パウロ書簡だけ読んでいては、信仰義認は分かるが、行いの必要性が分からないから、ルターが「わらの書簡」とくさしたヤコブの手紙なども読む必要がある、といった議論は、まさに聖書を「寄せ木細工」と考えている発想法です。寄せ木細工というのは、それぞれのパーツはそれぞれの独自性と必要性を持っており、全体が互いにおぎない合って、初めて全体が完成される、という考え方です。しかし、そのような考え方なら、別にヤコブの手紙を読まなくても、パウロ書簡にも行いの必要性は十分説かれておりますから、救いには十分である、という考え方が成り立ちます。元々、古代教会（特に、教父エイレーナイオスなど）が聖書正典を結集したときの基本的な発想法は、決して平面的な寄せ木細工のセットを造ることではなく、むしろ、歴史を貫く神の救いの大河ドラマをまとめることだったのです。そこでは、キリストがアルファであり、オメガであり、そして中心です。その歴史の究極の目標は、「時が満ちるに及んで、救いの業が完成され、あらゆるものが、頭であるキリストのもとに一つにまとめられる」こと、すなわち、「天にあるものも地にあるものもキリストのもとに一つにまとめられる」ことだったのです（エフェソの信徒への手紙一章一〇節）。従って、わたしたちが聖書を繰り返しまんべんなく読むことの最も重要な目的は、このキリストをしっかりと知り、キリストにおいて前進する神の救いの歴史の中に自分自身を見出すようになることなのです。

なお、聖書には全体があるという考え方は、聖書のある部分の理解は、他の部分の理解からあきらかにされ、照らし出されることが出来る、ということを意味します。聖書全体の理解は各部分の理解から一層深められて行きます。つまり、全体の理解と部分の理解との間には、相互に深め合う作用（これを、「解釈学的循環」と申します）があるわけです。宗教改革者たちは、「聖書は聖書から解釈される」と教えました。この考え方は、ローマ・カトリック教会が教皇の至上の解釈権（教導権）を認めているのに対して、そのようなものを認めず、聖書が教会や教皇よりも「上」にあると考えるプロテスタント教会では、非常に重要な解釈原理であるわけです。

（註）一度も全巻通読をしたことのない方には、早くこの「全体」の概略を知るために、通読の前に、手頃に入手できる「聖書物語」を一度通読なさることをお勧めします。決して無駄にはなりませ

ん。現在は手塚治虫の旧約聖書物語以来、漫画聖書物語にもかなりよいものが見られます。昔の「聖書物語」では、小塩節先生の訳したフッセンエッガーのものが比較的推奨できます。あるいは、聖書全巻を簡単に解説した本を一冊お読みになるのもよいでしょう。

第四節　教会の信仰告白に導かれて読む

次に、聖書を正しく読むために、もう一つの大事な点を申し上げたいと思います。なぜなら、教会は聖書が教会の信仰によって正しく読まれるために、聖書の「骨格」が何であるかを明らかにしようとつとめてきたからです。それが、教会の「信仰告白」と呼ばれるものです。従ってわたしたちは、聖書を教会の信仰告白に導かれて読む必要があります。なぜかと言えば、わたしたちは非常にしばしば、聖書を読み違えてしまうことが多いからです。教会の信仰告白は、人間が最も読み違いを起こしやすいところ（例えば、信仰義認の教えなど）について、丁寧な指針を与えてくれます。ですから、聖書を通読することと共に、教会の信仰を「信仰告白」によって学んでおくことも必要です。ただし、ここで言う教会の信仰とは、個々のキリスト者が所属している「各個教会」の信仰や、一定の教会群によって構成される「教派」の信仰のことではありません。聖書の信仰と同じ信仰とは、二千年の昔から今日に至るまで生き続けてきた「公同教会」の信仰のことです。なぜなら、聖書は公同教会の信仰によって正典化された、とも言えますし、逆に、公同教会は聖書によって生まれた、とも言えるからです。

例えば、「日本基督教団信仰告白」は、非常に簡潔な形でこの「公同教会」の信仰を告白していますので、これを例にとってご説明します。

「日本基督教団信仰告白」は、「旧新約聖書に基づき、基本信条および福音的信仰告白に準拠して」制定されたもの、と説明されています（「日本基督教団教憲」第2条参照）。ここで「日本基督教団信仰告白」が聖書にもとづいているのは当然ですが、その他に、「基本信条」と「福音的信仰告白」に準拠している、と述べられています。では、「基本信条」とか「福音的信仰告白」とは、何なのでしょうか。

「基本信条」とは、教会が最初の四〜五世紀の間に形成し、世界中のすべての教会で告白されている四つの信条のことで、別名「世界信条」とも言います。すなわち、「使徒信条」、「ニカイア・コンスタンティノーポリス信条」、「アタナシオス信条」、「カルケドン信

条」の四つです。これらが「基本信条」とか「世界信条」と呼ばれますのは、初代教会の教理的基礎に関するすべての論争がこれらによって一応の決着を見て、プロテスタント教会も、ローマ・カトリック教会も、ギリシア正教会も、世界中のすべてのキリスト教会がこれらの信条を告白しているからです。

ですから、聖書解釈はこれらの「基本信条」によって導かれることが必要です。

「基本信条」の内容は割と簡単です。「使徒信条」は一番古く、二世紀に生まれています。それは聖書の信仰の要約でもあり、聖書を読もうとする人は、少なくとも一度は、その一つ一つの言葉の奥深い意味について教会でよく学び、味わっておく必要があります。また、ある意味では、使徒信条をよく知ってさえいればそれで十分である、とも言えます。なぜなら、他の三つの信条は、主として三位一体の信仰（三位一体論）とキリストが神であって人であられるという信仰（キリスト両性論）を告白しております。そして、使徒信条はすでにそれらの信仰を踏まえているからです。大変ざっぱくな言い方ではありますが、聖書はイエスが復活したからこそ書かれたのであり、したがって、キリストがだれであられるかというペトロの信仰告白（マタイによる福音書一六章一六節参照）、すなわち、キリスト両性論が公同教会の信仰の基礎にあります。また、このキリスト告白が成り

立つためには、神は三位一体の神であると理解されなければなりません。ですから、三位一体の信仰とキリスト告白が、公同教会の信仰の根底にあるものと言えるのです。

次に、「福音的信仰告白」(註)とは何なのでしょうか。わたしたちが聖書を読むときには、使徒信条または他の三つの世界信条の他に、わたしたちプロテスタント教会が告白している「福音的信仰告白」をも考慮に入れる必要があります。それはどのようなものであり、また、なぜそれが必要なのでしょうか。

もしも「福音的信仰告白」というものが単なる「教派的信条」の一種であるならば、そのようなものは必要がないはずです。ある特定の立場に立った教派信条によって聖書を読むことは、かえって聖書の真理性を狭め、公同性をそこなう危険性があるからです。ですから、問題は、「プロテスタント教会」が「ローマ・カトリック教会」という一つの「教派的教会」に対抗するもう一つの「教派的教会」であるのか、それともそうではなくて、むしろ、両方とも公同教会を志向している中でのそれぞれの段階にある、という考え方を優先的に取るべきなのか、ということです。わたしはむしろ、後者の考えが正しいと思っています。つまり、ローマ・カトリック教会は、ローマ的な段階にいるカトリック教会（公同教会）であり、プロテスタント教会は、福音的な段階にいるカトリック教会（公同

教会）である、ということです。この問題は、結局、わたしたちプロテスタント教会の根本教理である「信仰義認」の教えをどのように位置づけるか、という問題に帰着します。わたしたちプロテスタント教会の信徒は、もちろん、この教えは聖書の真理を狭めてしまうようなある特定の「教派的立場」ではなく、むしろ、聖書の根本的なメッセージをより鮮明にしてくれる教えだと理解しています。その意味で、それは聖書に最もふさわしい「先入見」だと言えましょう。したがってわたしたちは、ローマ・カトリック教会も、真に公同（カトリック）教会であろうと欲するならば、いずれいつかは信仰義認の教えを受け入れてくれるだろう、という希望を持っているのです。実際、ローマ・カトリック教会の聖書釈義も、最近はそのことを認めつつあることは、喜ばしいことです。

したがって、「福音的信仰告白」は「基本信条」と共に、聖書を正しく解釈するために必要不可欠なものである、と考えることができます。信徒の皆様が聖書を読む場合にも、福音的信仰告白のどれか一つを（例えば、「ハイデルベルク信仰問答」などを）よく学ぶ必要があります。これらの学びは教師によって導かれる必要がありますが、日本の教会ではそのための様々な機会が作られていることと思います。

（註）「福音的信仰告白」の範囲はやや漠然としていますが、よく知られているものでは、「アウグスブルク信条」、「ウェストミンスター信仰告白」、「ルターの大小教理問答」「ハイデルベルク信仰問答」、「ジュネーブ教会信仰問答」などがあります。

第五節　聖書を日常生活の中で読む習慣の確立

最後に、聖書をどのように読んだらよいのか、ということの実際的な側面について、幾らか述べてみたいと思います。

聖書はまんべんなく、そして全巻通読を実行する必要があります。まず、その志を立てることが必要です。そのためには、その分量から言っても、毎日読むことが望ましいのです。そのためには、いくつかの実際的な創意工夫が必要です。

聖書を読む読み方は、別に難しく考える必要はありません。創世記からヨハネの黙示録まで、順次読む「聖書通読」の方法もありますし、「聖書日課」を買い求めて、それに従って読むことも出来ます。日本基督教団の『信徒の友』には、毎日の聖書日課とその解説、そして祈られるべき教会とその簡単な伝道状況などが書かれています。大事なこと

は、聖書をまんべんなく、全巻通読することです。旧約三章、新約一章を読めば、大体一年と少々で聖書全巻を読み通すことが出来ます。また、最後に詩編を一編お読みになれば、祈りへと導かれます。

最も望ましいのは、教会全体で聖書を読もうという空気が盛り上がり、お互いに励まし合うことです。ある教会では、牧師が「聖書通読表」を作って希望者に配っています。毎日読んだ箇所を黒く塗りつぶしてゆくのです。わたしの教会でもそれを取り入れました。また、わたしの教会では月一回礼拝後に聖書輪読会を開いています。牧師の解説なしに、聖書を二〇分ほど輪読して主の祈りを祈って解散するだけですが、かなりの人数が残ってくれます。

聖書を読んで祈る最も理想的な形としては、やはり、「家庭礼拝」を守ることだと思います。そこでは聖書の朗読――しかも、交わりの中での朗読という、聖書の本質に最もふさわしい形での朗読――と祈りが共有され、同時に、クリスチャン・ホームの形成とキリスト教教育がなされるからです。この場合には、朝食前なども考えられます。

「子らに残すことばはひとつ
わが家は　朝な夕なに祈りする家」

この歌と共に、「朝の祈り」と題された林竹治郎の絵が思い出されます。赤いちゃぶ台を囲んで一家五人が祈りをささげている有名な絵で、この家のにおいまで感じられるような絵です。聖書朗読と祈りを主とし、短い奨励があればそれを読みます。また、幼児を持つ親は、出来るだけ早く幼児をその中に加える方がよいでしょう。この場合には、子供が眠る前のひとときもそのふさわしい時の一つです。母親か父親が幼児に絵本や聖書物語の「読み聴かせ」をし、それから「夜の間もお守りください」と祈ることが、理想的なキリスト教教育となります。その時に創り出される時間は、親子にとって最上の、最も豊かな時となるだけでなく、家庭生活の中心とさえなることが出来ます。そこにおける共なる祈りが、幼児にどんなに大きな平安を与え、その人格形成に深い影響を及ぼすことが出来るか、実例は幾らでも挙げることが出来るでありましょう。

家でたった独りで読む場合に、一日の内一定の時間帯を特別に定めることが大事であると思います。昔は「時祷」という言葉さえあって、一日の内一定の時間を「聖なる時」と定めて祈りと聖書朗読のためにささげたのです。

もう一つ、案外大事なものに、場所の問題があります。つまり、「聖なる時」があるように、「聖なる場所」があるのです。もしクリスチャン・ホームである場合には、家のど

こかに聖なる場所や祈りの部屋を設け、そこに立派な聖書を置き、十字架を立て、だれでもそこで神に祈れるようにすることは、比較的容易ですから、そのことをおすすめします。しかし、日本のほとんどのキリスト者は、家の宗教としてではなく、個人の信仰として信じていますから、このようなことはただの理想かも知れません。しかしそれでも、自分の部屋なり、机の片隅なり、台所のどこかなりに、自分の聖なる場所、「聖所」をつくることは、不可能ではありません。

初期の教会は、迫害の盛んなときでも、羊飼い、葡萄の樹、魚などの信仰を象徴する小さな飾り物を置いて聖所としました。また、ロシア正教の信徒たちには、「イコン」を飾るという習慣があります。今日の時代では、聖画や美術作品も沢山あります。ルオーのキリスト像やレンブラントのエマオのキリストの写真版でもよいでしょうし、もちろん、小さな十字架像を安置してもよいのです。また、祈りを主題としたもの――「ゲツセマネの祈り」には数多くの名作がありますし、「サムエルの祈り」やミレーの「晩鐘」など――を飾ることも出来ます。最近では、美しい初頭文字装飾やカリグラフィーを施した聖書の各国語訳などや、有名な聖堂の写真も入手することが出来ます。神学者カール・バルトは、イーゼンハイムの祭壇画をいつも書斎の机の上に飾っていたそうです。P・T・フォーサイスもまた、『祈りの精神』という本の中で、少しニュアンスは異なりますが、「祈りの道を作ること」について述べています。

第二部　祈りをおすすめする二つの説教

祈りは、祈らざるを得ないから祈る、という面があるでありましょう。わたしたちは土の塵から創られた被造物であり、歴史を治めておられる御方は全能の神ですから、その神に自分たちのみじめな窮状を訴え、神の助けを呼び求めずにはおられないのは当然です。しかし、それだけではなく、祈りは神から求められているものです。単に教会で過ごす日曜日だけでなく、わたしたちのウイーク・デイの長い六日間も、父なる神が絶えずわたしたちを祈りに召し出し、御霊を新たにお与えくださるという、この召しにおこたえする時間です。お互いに、このような時代であるからこそ、祈りを深めたいものです。「主の名によって」祈るとき、祈らない場合には決して起こり得ないことが起こることを固く信じて、祈りましょう。

祈りをおすすめする説教を二篇、お届け致します。これらは「主の祈り」の中の最初の三つの祈りからその主題を取られたものです。

説教Ⅰ　「『父よ』と祈る喜び」

聖書（マタイによる福音書第六章九節）

「だから、こう祈りなさい。

『天におられるわたしたちの父よ』」

Ⅰ　力強い祈り

わたしどもは生きていて、様々な不安を覚えます。人間関係の不安、健康の不安、仕事、家庭、出世、その他、数え上げたら切りがありません。自分は果たして幸福の星の下に生まれたのかどうか、と自問自答しながら、何かにすがりたい気持ちを覚えるとき、祈りとは何か、祈りというものは聴かれるものなのだろうか、などといった疑問を持たれる方もおられるでありましょう。また、信仰のある方でも、御自分の祈りが聴かれているのかどうか、一抹の不安を覚える方もおられるでありましょう。また、何かよい祈りのお手本のようなものはないか、とおたずねになる方もいらっしゃいます。

最近は日本でも、立派な『祈祷集』が沢山出るようになりました。その中に、ブルームハルトという人の『夕べの祈り』という祈祷集があります。これは、是非皆さんにご推薦できるものです。ブルームハルトの祈りをそばで聴いていて感動した人が、せめて言葉だけでも、と考えて書き留めたものを集めたものです。ブルームハルトという人は、一九世紀に活躍したドイツの田舎牧師ですが、カール・バルトやエミール・ブルンナー、その他大勢の、二〇世紀の教会を支えた大神学者たちに大変大きな信仰的影響を与えた人です。この人の祈りは、とても力強い祈りなのです。しかも、特長があります。どの祈りも、「主の祈り」の前半の三つの祈り、すなわち、「御名が崇められますように。御国が来ますように。御心が天に行われるとおり、地にも行われますように。」という祈りのヴァリエーションが最初に置かれているのです。そして、実に不思議な祈りなのです。これを訳したわたしの尊敬する先生が、「わたしはこの祈祷集を訳し終えて、自分の祈りがすっかり変えられてしまったことを発見した」、とおっしゃっています。つまり、それぐらい、ブルームハルトの祈りには力強さがあるのです。

しかしそれは、実は、「主の祈り」そのものが力強いからだ、と言うべきでありましょう。と申しますのも、この祈りは、主がこの祈りを祈り続けながら、十字架への道をたった一人で歩まれ、そして、この祈りに支えられて、最後の最後までみ苦しみに耐えられた祈りだからです。

「主の祈り」を普段のわたしどもの祈りと比べると、その力強さにお気づきになられると思います。わたしどもが神に祈るときには、いつも自分の祈りが神にまで届くかどうか、不安です。わたしどもの祈りは弱く、言葉はおぼつかなく、わたしどもはいわば、不安げに手を差しだして物乞いするような気持ちで祈ることが、多いのです。しかし、「主の祈り」は、そのようなわたしどもの祈りとは、根本的に質の違うものなのです。

Ⅱ　父と子

では、なぜ、「主の祈り」は力強いのでしょうか。その力強さの秘密は、どこにあるのでしょうか。その秘密は、この祈りの最初の言葉、「天の父よ！」という呼びかけの言葉にあるのです。主はいつも、「天の父よ」との呼びかけの言葉で祈られ、そこに深い平安と喜びを感じておられたからです。

ルカによる福音書一一章一〇節以下を見ますと、主が弟子たちにこの祈りを教えられた時の情景が、もっと鮮やかに描かれています。主がいつものようにたった一人で祈ってお

られました。祈り終わって、弟子たちのところにお帰りになったそのお顔は、いつもながら、不思議な喜びと平安に輝いていたのです。そこで弟子の一人が、「主よ、わたしたちにも祈ることを教えて下さい」と懇願したので、この「主の祈り」が教えられたのです。主はこの祈りの力によって、死にいたるまで、しかも、十字架の死にいたるまで、父なる神の御心に従うことが出来たのです。その意味で、「主の祈り」は力強い祈りだ、と言えるのではないでしょうか。

祈りについて大変詳しい研究をしたあるドイツの高名な学者が、ゲッセマネの祈りの中の、「アッバ、父よ！」という言葉について、非常に貴重な研究を発表しました。それによりますと、この祈りの中の「父」という字は、「アッバ」という字ですが、これは、幼な児が自分の家で父親に向かって、信頼と敬慕の念を込めて呼ぶときの言葉なのだそうです。「パパ！」というのが一番語感が近いかも知れません。そして、神をこのように信頼に満ちて「父よ！」と呼んだ人は、主イエス以外には、古今東西のどんな偉大な宗教家にもまったく見られない、ということです。ユダヤ教の祈りの中でも、せいぜい神を「国民の父」という呼び方しかしていません。ところが、主イエスは普段の祈りの時にも、この「アッバ」という言葉で祈っておられたのです。

ですから、この祈りの力強さは、神を「父よ！」と呼んでいる「父と子の関係」にあります。そこにおいて主は、「父」に対する「子」として、まことに深い平安と喜びを与えられていたのです。従ってこの祈りは、本来から申しますと、三位一体の中の子なる神であられる主イエスだけに許されている、特別の祈りであったのです。

Ⅲ　神の養子とされたわたしたち

ところが、主はそれと同じ祈りを、わたしどもにも教えられました。「あなたがたも、このように祈りなさい」、と。つまり、主が「天におられるわたしたちの父よ！」という呼びかけの言葉をわたしどもにも教えられたということは、主御自身と同じ気持ちで神を「父よ！」と呼びなさい、と言われたことになるでありましょう。主イエスと同じように、畏れと信頼に満ちて、幼な児のごとく、「天におられるわたしたちの父よ！」と祈ってもよい、と言われたことになるでありましょう。しかし、そうだとすると、この「父よ」という呼びかけの言葉は、あまりにも大胆不敵な、ひょっとすると、不遜な、言語道断で、厚かましい言葉なのではないでしょうか。神を「父」と呼ぶことが、わたしども人間には、本当に許されているのでしょうか。なぜなら、神は天の玉座にいます聖なる御方なの

です。「玉座の前は、水晶に似たガラスの海のようであった」（ヨハネの黙示録四章六節）と書いてあります。また、「神を見た者は必ず死ぬ」、とまで言われてきたのです。

しかし、主はたしかに弟子たちに教えられたのです。「あなたがたも、このように祈りなさい」、と。なぜ、祈る資格のないわたしどもに、「あなたがたも、祈りなさい」、とおっしゃるのでしょうか。その背後には、キリストの十字架によるあがないの事実があります。それによって、わたしどもが「神の子」とされた、という事実があるのです。

わたしはかつて、祈りについて、こういう体験をしたことがあります。

わたしがまだ神学生の頃、ある教会の伝道所（現在では教会）に夏期伝道に行ったときのことです。毎週火曜日になると、その教会に来て牧師同士の打合会をし、夏期伝道生であるわたしはご指導をも受けました。ある時の打合会で、わたしは自分のつかわされた伝道所での伝道の行きづまりから来る不安について、率直にお話をしました。そこで祈る自分の祈りも、正直言って、消え入りそうだったのです。するとその教会の牧師は、いくつかの御示唆を与えてくださった後で、わたしのために祈ってくださったのです。この時わたしは生まれてはじめて、祈ることの喜びと平安を知りました。その祈りの言葉は、神から一つずつ言葉を授けられて祈っているような祈りでした。すぐ前に父なる神がおられ、

御子キリストが共におられ、先生と父なる神とが「お話をしている」ような祈りでした。かたわらで目を閉じているわたしまでが、同じように天にまで引き揚げられ、御座の前で、その語らいの輪に加えて頂いているような、「神共にいます」という不思議な気持ちを体験させられたのです。帰りの電車の中で、あの不思議な気持ちは一体なんだったのだろう、と一生懸命考えました。一つの聖句が、わたしの頭の中に浮かんできました。ローマの信徒への手紙八章一四節以下の御言葉です。

「神の霊によって導かれる者はみな、神の子なのです。あなたがたは、人を奴隷として再び恐れに陥れる霊ではなく、神の子とする霊を受けたのです。この霊によってわたしたちは、『アッバ、父よ』と呼ぶのです」

ここに、「神の子とする霊」という御言葉があります。口語訳では、「子たる身分を授ける霊」となっています。御子イエス・キリストの十字架のあがないによって、わたしどもも、御子イエス・キリストと同じ立場、同じ「神の子」としての身分を授けていただき、同じ神を「父よ！」と呼ぶ特権を与えてくださったのです。本来、何一つ祈る資格のない者です。神の前ではひたすら物乞いするより他にない、罪と汚れに満ちた者です。ただ主の十字架のあがないの故に、神を「父よ」と呼ぶ資格のある「子」とされたのです。

このことを知ってから、わたし自身の中にあった祈りへの不安も、伝道の先行きへの不安も、一気に消えてしまいました。そして、自分は伝道者として立つのだ、という強い確信を与えられたことでした。

Ⅳ　御霊を注いでくださる

ですから主は、本来ならば祈る資格のまったくないわたしどもに対して、「わたしと共に父に祈りなさい」とおっしゃって、わたしどもを御もとに招いてくださるのです。このことを、先ほどの聖書では、主がわたしどものために御霊を注いでくださる、というふうに述べています。「神の子とする霊を受けた」、という御言葉です。この御霊は、主御自身からいただく御霊と考えれば、わたしどもが祈るとき、主が共にいてくださる、と言ってもよいですし、主の御霊御自身が、弱いわたしどもを助けて下さる、と言ってもよいのです。かつて武蔵野教会の牧師であられた熊野清子先生が、わたしどもが「主の祈り」をさげるのは、ちょうど幼子が習字をならうときに、筆を持つ自分の手の上に先生が手を重ねて一緒に筆を動かしてくださるようなものだ、とおっしゃいました。まことにそのとおりです。わたしどもが神を「父よ」とお呼びすることが出来るようになるために、主御自身がわたしどものかたわらにおられて、一緒に手を合わせて祈ってくださるのです。

主が「父と子の平和のきずな」である御霊をお与え下さることは、まことに有り難いことです。祈りは永遠の父の聖なる玉座の前に出ることでありますから、ただ祈る資格が与えられたから、だれでもすぐに祈れる、というわけにはまいりません。全知全能にして光の父であられる神の玉座の前に出るのですから、たとい主のみ赦しの故に許されているとしても、口ごもり、言葉を失い、祈りの「失語症」に陥ってしまいます。パウロのような祈りの達人でさえ、「わたしたちはどう祈るべきかを知りませんが、〝霊〟自らが、言葉に表せないうめきをもって執り成してくださる」（ローマの信徒への手紙八章二六節）、と告白しているのです。この主の御霊が、祈るわたしどもを力づけ、祈ったあとまでも、わたしどものうちに住み、平安と喜びを与え続けてくださるのです。

最後に、もう一つのことを申し上げておきたい、と思います。それは、主が「わたしたちの父よ！」とおっしゃっておられることです。つまり、わたしどもキリスト者の祈りは、主イエスのみからだなる教会を中心とする「わたしたち」の祈りなのです。この祈りの中心には、祈っておられる御子イエス・キリストがおられます。その周囲には、祈る教会、「わたしたち」がいます。それは、「神の家」なのです。老いも若きも、祈りの初心者

も、祈りに不安を覚える人も、祈りの達人も、みな神の家庭の中に養子として迎えられているのです。この教会の交わりの中で、はじめて、わたしども一人一人の祈りが成立するのです。キリストから離れ、御霊を注がれなければ、祈りがあり得ないように、教会から離れても祈りはあり得ません。わたしが申し上げておりますのは、必ずしも洗礼を受けたキリスト者だけの「輪」のことではありません。主が教会に集めてくださった全ての求道者にも、この祈りの輪は開かれています。いや、むしろ、潜在的には、人類全ての者が、この祈りの輪に加わるようにと招かれています。「こうして、羊は一人の羊飼いに導かれ、一つの群になる」（ヨハネによる福音書一〇章一六節）のです。

神を「父よ！」と呼ぶことこそ、キリスト者の祈りの神髄です。神を「父よ！」と祈るとき、わたしどもは自分が恵みによって「神の子」とされたことを実感します。自分の人生は神の子の人生であると確信し、人生を大いなる肯定と楽観の下に生きることが出来ます。もはや、自分は果たして幸福の星の下にあるのかどうかと問うたりすることとは、きっぱり縁を切ることが出来ます。「主の祈り」は、まことに力強い祈りです。

説教Ⅱ　「救いが近づいている」

聖書（マタイによる福音書第六章一〇節）

「御国が来ますように」

Ⅰ　神の国は近づいた

「主の祈り」の最初の三つの祈りは、わたしども人間にとって、最高で最善のことを、祈り求めている祈りです。まず、

「御名があがめられますように」。

これは、すべての人が天にいます父なる神の御名を讃美し、喜びに溢れている状態を祈り求めています。そして、

「御国が来ますように」。

これは、天の国、神の慈しみあふれる御国が、この地上でも実現するように、と祈っています。そして、

「御心が行われますように」。

すなわち、神の最善にして最高の御意志が、天で完全に行われているように、この地上でも完全に行われますように、と祈っています。

実に素晴らしく、内容豊かな祈りではないでしょうか。主イエスにとりましては、父なる神の御名、その御国、その御心というものが、寝ても覚めても最大の関心事でありました。この三つの祈りは、結局同じ一つの状態が実現することを祈っている祈りだ、とも言えます。

本日は、皆さまとご一緒に、この中の特に第二の祈りに注意を集中してみたい、と思います。主はわたしどもに、「御国が来ますように」と祈りなさい、と教えられました。

ご承知のように、主イエスの宣教内容は、「神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい」（マルコによる福音書一章一五節）というものでした。「神の国」、「天の国」とは、神の「御支配」という意味です。神がご支配なさるところですから、「神の国」と言うのです。しかし、現在のところ、まだ何か地図上で特定できるような、ある一定の地域のことではありません。主イエスはただ、「近づいた」、と言われただけです。主は一方で、「わたしの国はこの世のものではない」（ヨハネによる福音書一八章三六節）とも言われました。神の国はこの世のものではなく、地上には軍隊も領土も持ちません。もし軍隊や領土のある国だとすると、「神の国が近づいた」というニュースがテレビで実況放送でもされようものなら、それこそ、最終戦争でも始まったのではないか、と大さわぎになってしまうでありましょう。しかしそうではなく、わたしどもはテレビで見るのとは違った仕方で、神の国の到来の報せを受けているのです。すなわち、地上で神の御名があがめられるたびごとに、そして、「御国が来ますように」という祈りがささげられるたびごとに、わたしどもは「神の国が来た」という報道に接しているのです。

また、主は神の国は「『ここにある』『あそこにある』と言えるものでもない。実に、神の国はあなたがたの間にある」ともおっしゃいました（ルカによる福音書一七章二一節）。そうなのです。神の国は、すでにイエス・キリストのご降誕において到来し、信ずるわたしどもの群の中に、また、わたしどもの心の中に、「義と平和と喜び」（ローマの信徒への手紙一四章一七節）として、「すでに来ている」のです。ですからそれは、次のようにたとえることが出来ます。つまり、今はすでに朝が来ていて、家々は明るい朝日にすっぽりと包まれているのに、それをまだ知らない人々の家には、「罪」という名前の分厚いカーテンが下りていて、中は暗いのです。しかし、そのカーテンを開けさえすれば、部屋の

隅々まで、明るい朝日が射し込むようになっているのです。

しかし、このような中途はんぱな状態も、終わりの日が来ると、もうなくなってしまいます。すなわち、全ての人の目に、十字架につけられた主の救いとご栄光が明らかとなるのです。それが、主が再び来られ、歴史が完成し、終わる日です。たといその時まで、この世は依然として暗く、希望もなく、悪の支配がはびこっているように見えても、神の国はもうすぐそこまで来ているのです。すでにわたしどもの心の扉を激しくノックする音が聞こえているのです。

この祈りは、そういう緊迫した終末待望の中で、「主よ、一日も早く来て下さい！」と祈っている祈りです。

Ⅱ 「神の国」と「地の国」

さて、この祈りは、神の御支配が人間にとって最高・最善のものである、という堅い信仰的確信と熱情がなければ、祈れない祈りでありましょう。そのせいか、あまり真剣には祈られていないように思われるのです。

一般には、神の国が来ることは、必ずしも人間にとって最高・最善のことであるとは思われていません。人間にとっては、「神の国」がいきなり天から降ってくるよりも、歴史が次第に進歩発展し、ついに人間の手によって地上に「神の国」が実現する方が、ずっと好ましいのです。ことに、産業革命以来、歴史の進歩を信ずるようになったヨーロッパの人々は、「神の国」とは人間が追求し、いつかこの地上で実現出来る目標であり、それは、戦争のない平和な世界において、人類が兄弟愛で結ばれることによって実現する、と考えられるようになりました。しかし、これでは本当は、「神の国」ではなく、「人の国」となってしまいます。「天の国」よりも、「地の国」と呼んだ方がよいでありましょう。例えば、一二月になると必ず歌われるベートーベンの第九の中の「歓喜の歌」という合唱は、詩人のシラーが作った詩ですが、そこにはそのような理想世界がうたわれています。しかし、「友よ、この調べにもあらず！」なのです。神の国の調べは、もっと素晴らしいものだからです。

果たして、主の再臨なしに、人間の手でこの地上にユートピアを造るという企ては、成功するのでしょうか。ロシアのドストエフスキーという作家は、『カラマーゾフの兄弟』の中の「大審問官」という章で、そのような考え方に対する痛烈な批判を述べています。ドストエフスキーのこの批判は、直接には、当時ロシアで起こり始めた共産主義思想に対

して浴びせられたものです。果たして、二〇世紀という世紀は、この共産主義思想が大がかりに実験され、ソ連邦の崩壊によって、ドストエフスキーの批判が正しかったことが証明された世紀である、とも言えます。では、続く二一世紀はどうなのでしょうか。一九世紀、二〇世紀は戦争の世紀だったが、二一世紀こそは平和の世紀であるに違いない、と人々は期待しました。ところが、いざふたを開けてみると、この世紀はテロリズムと地球温暖化の世紀でした。ですから今日では、多くの人々は、歴史の終局とは人類の破局が来る時ではないか、とさえ考えているのです。このように、神ならぬ人間が神を押しのけ、自分の手で理想の「人の国」「地の国」を造り上げる考え方が、深刻に困難な壁に突き当たり、もがき苦しんでいるのが現代という時代、わたしどもの時代なのではないでしょうか。

主イエスは「御国が来ますように」と祈りなさい、と教えられました。それは、神が御支配なさる御国こそ、人間にとって最高・最善の国であるからです。それは、聖書を一貫して流れている、わたしどもの「希望」の中心なのです。

旧約の人々も、キリストが来ることによって神の国が成就することをひたすら待ち望んでいました。新約の人々は、主が再び来られる日を待ち望み、「主イエスよ、来て下さい」

（ヨハネの黙示録二二章二〇節）と祈り続けています。その日には、ヨハネの黙示録二一章にありますように、主なる神がとこしえに死を滅ぼし、わたしどもの目から涙をことごとくぬぐい取ってくださり、わたしどもを御子の祝宴にあずからせてくださるのです。従って、この祈りは、わたしどもにとって、まことに大きな「喜びの日」を待ち望む祈りです。なぜなら、この日にわたしどもは再び主イエスにお会いでき、主の十字架の御愛があまねく全地に知られるようになるからです。その時に、わたしどもは一切の罪から清められた姿で、救い主イエス・キリストと顔と顔とを合わせてまみえまつることが許されるでありましょう。なぜなら、この地上にあるとき、わたしどもは主の十字架の意味をまことにおぼろげにしか、いびつな鏡に映すようにしてしか、見ることが出来ませんでした。しかし、その時には、わたしどもは顔と顔とを合わせて主を見るので、主の十字架がまことにわたしども自身のためであったことを、目の当たりに知り、心の底から悟るようになるからです。その時、わたしどもの心は喜びで満たされるでありましょう。その喜びをわたしどもから奪い去る者はいないのです。

ですから、キリスト者であるなら、そして、その日がどのような日であるかをよく知っているなら、一日も早くその日が来て欲しい、と熱心に願うはずです。それは実際、わた

しどもにとって、文字通り、最高・最善の日だからです。

Ⅲ　神の救いのご意志

ただ、わたしどもはここで、まことに憐れみに富み給う神の救いのご意志について、留意する必要があります。なぜなら、神は一人でも多くの者が、この福音の喜びに与って悔い改めた上で、神の国に入ることを望んでおられるからです。一人でも多くの者が、「神の国」が「人の国」とは較べものにもならない善いものであると知り、熱心にその日の到来を願うようになって欲しいのです。なぜなら、神の国とは、罪人が一人でも悔い改めるなら、天には大きな喜びがある、という国なのですから（ルカによる福音書一五章一〇節）。

ですから主は、「まず、福音があらゆる民に宣べ伝えられなければならない」（マルコによる福音書一三章一〇節）、「それから、終わりが来る」（マタイによる福音書二四章一四節）、と教えられました。

わたしどもはその日まで、主が教えられたように、「御国が来ますように」と祈ることが大切です。人間の為しうるすべての善きわざは、「父よ、あなたの御名があがめられ、

御国が来、御心が行われますように！」という祈りを祈ることから始まります。ある方は、今日の日本の教会に一番欠けているものは、この祈りを主が祈られたように祈る熱情ではないか、とさえ言っています。主はこの祈りにおいて、全世界の救いのために祈ることをわたしどもに教えられました。この祈りの意味は、「御国の素晴らしさを全ての人が知るに至りますように」という祈りでもあります。「神の御支配とその招きに、全ての人が与りますように」という祈りでもあります。ですから、わたしどもがこの祈りを祈るとき、わたしどもは世界伝道と世界平和の幻を抱くことが出来るのです。実際、「主の日が近い」と信じたパウロは、「福音を告げ知らせないなら、わたしは災いだ」（コリントの信徒への手紙一、九章一六節）とまで言っています。

Ⅳ　主は近い

更に申し上げたいことは、わたしどもはこの祈りを祈る時、祈る者にふさわしい生き方をするようになる、ということです。それは、どのような生き方なのでありましょうか。もちろんそれは、神の国がすぐにも来るから、もう地上の生活を汗水たらしてすることには意味がない、という生き方ではありません。これは少しも聖書的でも、信仰的でもあり

ません。むしろ、宗教改革者のルターが言いましたように、「たとい明日、神の国が来るとしても、わたしは今日、このリンゴの苗を植える」という生き方です。それはもはや、もう一度せっせとあの神の手を要しない「地の国」の建設のためにいそしむことではありません。むしろ、天に国籍を持つ者として、最後の最後まで、「善かつ忠なる僕」として生きることです。その観点から考えれば、「リンゴの苗を植える」とは、やはり、隣人愛のわざにはげむことでありましょう。そして、一人でも多くの隣人に福音を宣べ伝えることでありましょう。主はわたしどもがそれらのことにはげみつつ、主が再び来られる日を待ち望み、祈ることを、心からお喜びくださるのです。

前にもお話ししました、ブルームハルトという人は、生涯終末信仰に生きた人です。彼が残した言葉に、「わたしは、天の御国を心から慕うからこそ、この大地を愛するのだ」という有名な言葉があります。彼はこの言葉通り、大地を愛し、隣人愛と福音宣教にはげみました。そしてその中で、来る年も来る年も、今年こそは主が来られる年でありますように、という篤い祈りをささげました。彼が自分の家（牧師館）のかたわらに、一台の馬車を用意していた、という話は有名です。友人が彼に、「この馬車は何のために？」とたずねると、彼は胸を張って、「これは、主がおいでになったときに、わたしがこれに乗って真っ先に主をお迎えに行くための馬車だ」と答えたそうです。彼にとって、それはまさに、神にとっても、この人間世界にとっても、最高・最善のことが起こる日だったのです。

わたしは北陸の金沢で五年ほど伝道しておりました。灰色の空の下で、長い冬の間閉じこめられながら春を待つ思いは、そこに生活した者でなければなかなか分かりません。春が近づくと、雪が一番早く解けてなくなるのは、河原の土手の上なのです。まだ、どこもかしこも雪でおおわれているというのに、そこだけは真っ黒な土が見えて、春の日差しが当たり、つくしが頭を出しています。犀川の流れはゆるやかで、子供たちは土手の上に集まって、一日中、淡い春の日だまりの中を遊びます。どこを見ても雪の世界の中で、冬は去り、春が来ているのだ、という思いがあります。そして、一日も早く、すっかり春になって欲しい、と願うのです。わたしどもの終末待望も、それとよく似ています。キリストの身体なる教会に集められ、神の子とされた喜びにあずかる中で、「主よ、一日も早く来て下さい！」と祈る者でありたい、と思います。

第三部　伝道する信徒となろう

（第三部の簡単な要約）

ここでははじめに、聖書の信仰に教えられて「主の祈り」を祈るようになった者の信仰が、歴史の中で神のパートナーとなり、「神と共に働く信仰」であることが明らかにされます（第一節）。次に、それは具体的に言えば、キリストの体なる教会を建て（第二節）、福音を伝道する（第三節）信仰であることが、述べられます。最後の第四節では、教会が伝道する教会となり、信徒が伝道する信徒となることについて、やや具体的な指針を交えて述べられています。

第一節　神と共に働く信仰

わたしたちは本書の第一部で、特に聖書をまんべんなく、繰り返し読む生活を確立する必要があることを確認しました。それは、わたしたち自身が十字架と復活のキリストと出会い、絶えず御言葉によって養われるためにも（第三章第二節参照）、また、神の救いの歴史に参与するためにも、必要であったわけです（第三章第三節参照）。

また、第二部では、特に「主の祈り」の最初の部分の学びをとおして、神はわたしたちが神を「父よ」と呼んで祈ることを求めておられ、また、わたしたちが「御国が来ますように」と切に祈り求めることを望んでおられることを、学びました。

ところで、主の祈りを祈るわたしたちは、単に祈る人であるだけでなく、祈りを行う人となることが、求められています。すなわち、「主の祈り」を祈る者にふさわしい生き方が求められています。それは、第一部で得られた結論、すなわち、わたしたちが神の救いの歴史に参与する生き方と、完全に一致してくるはずです。

それでは、それはどのような生き方なのでしょうか。

それはすなわち、「御心が天に行われるとおり、地にも行われるように」（マタイによる福音書六章一〇節）と祈り、そのことを切に願って生きる生き方に他ならない、と言えましょう。「主の祈り」の最初の三つの祈りは、それほど緊密に結びついているからです。

そこでまず、わたしたちは、どういうものが具体的に言って神の御心であるかを、しっかりと把握しておく必要があります。

ここでこれからわたしたちが明らかにしたいことは、

第一に、神の被造世界とその歴史にかかわる最終目標は、旧約聖書の観点から言って

も、新約聖書の観点から言っても、「契約の成就」にある、ということです。神は契約の成就のために、天地万物をお造りになられ、その歴史を導いておられるからです。それは、「御国の到来」と言い換えてもよいでありましょう。

したがって第二に、歴史の中心は、イエス・キリストの御降誕においてその頂点を迎える、いわゆる「救済史」であることになります。言い換えれば、世界史の真の意味は、イエス・キリストの御降誕においてその頂点を迎えた神の救いの歴史であることになります。このキリストこそは、「今おられ、かつておられ、やがて来られるお方」、歴史の「アルファであり、オメガである」（ヨハネの黙示録一章八節）お方、最初であり、最後であられるお方、そのようなお方として、世界歴史と救済史の中心に立っておられるお方です。万物はこのキリストにあって造られ、キリストのために造られ、キリストによって支えられています（コロサイの信徒への手紙一章一五節、一七節）。

そして第三に、その完成（成就）は、イエス・キリストの再臨において完全な意味で実現する「神の国」、すなわち、神とわたしたち人間との完全な交わりとしての「永遠の命」に他なりません。それを旧約聖書では、「わたしはあなたたちのうちを巡り歩き、あなたたちの神となり、あなたたちはわたしの民となる」（レビ記二五章一二節）という定型句

で表現しました。新約聖書でも、ほぼ同じ表現が、ヨハネの黙示録二一章三節（「神が人と共に住み、人は神の民となる」）などで繰り返されています。ヨハネの黙示録の最後の二章は、この「神が人と共に住み、人は神の民となる」という定型句が、どのように豊かな内容を持つものであるかを様々な美しいイメージで語っています。すなわち、わたしたちの目の涙をぬぐって下さる神（同二一章四節）。様々な金銀宝石で飾られた天のエルサレム（同一〇節以下）。小羊のあかりで照らされた神の都（同二二節以下）。命の水の流れとその両岸でたわわな実を結ぶ命の木（同二二章一節以下）。輝く明けの明星としてのキリストの再臨（同一六節以下）、などなどです。

要するに、「神の御心」は「神の国」の実現である、と言えましょう。この「神の国」が、また「永遠の命」と呼ばれているものです。ただし、そのためには罪と死が克服されなければなりません。そして、罪と死が克服されたということが、イエス・キリストの十字架と復活の出来事であり、福音の内容であるわけです。

さて、世界史の意義が救済史であり、その目標が神の国、または永遠の命の成就であるとするならば、このことと、わたしたち一人一人の人生の意義・目的とは、完全に一致し

ているはずです。すなわち、わたしたち一人一人もまた、神の国、または永遠の命を求め、それに与るために造られており、そのために生きることが許されている、ということになります。例えば、カルヴァンが書いた「ジュネーブ教会信仰問答」第一問の問答には、はっきりとそのことが教えられています。

「問一　人生の主な目的はなんですか。

答　神を知ることであります」

ここで言われている「神を知ること」とは、単に神が存在していることやその本質、属性などについての知識を持つことではありません。神との深い人格的な交わり、言い換えれば、神を愛し、神を崇め、神の命である永遠の命に与らせていただくことを意味します。聖書が教える人生の意味は、このような意味で、イエス・キリストを知り、イエス・キリストを通して永遠の神を知ることなのです。そのためにわたしたちは「神の像」（創世記一章二七節）として造られているのです。

大変興味深いことは、この信仰問答の第三問で、それがわたしたちの最上の幸福である、と言われていることです。

「問三　では人間の最上の幸福は何ですか

答　それも同じであります」

神が定められた人生の主要な目的と、人間が自発的に求めるいわゆる「幸福」とは、神を知り、永遠の命を得ることにおいて、完全に一致するのです。その意味においては、救いを得るということは、神の民の一員となること、すなわち、天の国籍を与えられ、「永遠の浄福」を得ることだ、と言えましょう。古代の偉大な神学者であるアウグスティーヌスは、『告白』という書物の中で、「神よ、あなたはわたしをあなたに向かってお造りになられたので、わたしの魂はあなたの中に休らうまでは、平安を得ることがありません」という祈りを残しています（八章）。

ところで、このような意味での一人一人の魂の救いや永遠の浄福は、天国でようやく始まるのではなく、今すでにこの世において始まっています。なぜなら、憐れみに富み給う主は、この世に生きているわたしたちを礼拝に招き、説教と聖礼典の恵みに与らせることによって、永遠の命の喜びの片鱗に与らせて下さるからです。また、福音伝道によって、神の国に入る人の輪を広げること（伝道）をもお許しになったからです。その意味で、個人の救いと全世界の救いとは、完全に同じ方向にあります。ただし、その完全な意味での

実現と完成は、世界史の真の意義の完成であるイエス・キリストの再臨を待たなければなりません。一人一人のキリスト者は、それ故に、この神の救いの歴史の完成をひたすら願い求め、それを自分自身の最上の幸福と結びつけて考えることが出来るのです。

以上のことから結論されますことは、わたしたちキリスト者の人生に主が求めておられることは、神（主イエス）と同じ願いを持ち、神（主イエス）と共に生きて働く者となること、すなわち、「神のパートナー」となることだ、と言えるでありましょう。「パートナー」とは、「伴侶」という意味のほか、共同経営者、何かの活動（たとえば、ダンス）をするときの相手、という意味もあります。神と人間とは決して対等ではありませんが、神の圧倒的な主権と導きの下に、共に協力し合って何かを成し遂げる関係です。その意味では、神はわたしたちを敢えてなくてはならない相手、御自身のパートナーとして、お用い下さるのです。

では、神のパートナーとして生きるとは、どのような目標を持って生きることなのでしょうか。その中心は、次の二つのことにあると思います。

(1) 神を礼拝する「礼拝共同体」としての教会を形成すること。

(2) 終わりの日の主の再臨を待ち望みながら福音を伝道すること。

ただし、もちろん、教会を形成し、福音を伝道すること以外にも、わたしたちはこの世の生活を生きるために様々なことをしなければなりません。まず、食べてゆく（肉体的生命を維持する）ために、働かなければなりません。と言うよりも、働くことが許されています。なぜなら、労働は新約では、罪の呪い（創世記三章一七節以下）という観点においてよりも、兄弟愛（エフェソの信徒への手紙四章二八節、使徒言行録二〇章三五節）という観点から見られているからです。また、子孫を残し、人間性を成就するために、結婚生活や家庭生活を営むことが許されています。主は結婚を祝福されました（ヨハネによる福音書二章一節以下参照）。更に、社会を形成・維持するために、社会、国家、世界やその歴史ともかかわりを持つことが許されています。その他に、プライベートな時間や休息の時間も必要であり、許されてもおりましょう（マルコによる福音書六章三一節）。しかし、これらの「この世の生活」（職業生活、家庭生活、社会生活、個人生活）は、すべて右に述べた「教会形成と伝道」という中心と目標を持つときにだけ、真に意義のある、充実したものとなることが出来るのです。なぜなら、この世界の歴史の真の意味も、わたしたち一人一人の人生の究極の目的も、最上の幸福も、すべてが「教会形成と伝道」においてその中心と意義を持っているからです。ですから、わたしたちの人生は、学校生活を経て職

業生活に従事し、結婚して家庭生活を営み、社会参加をすることの中で、教会形成と伝道を常に最大の関心事として生きるときに、真に神のパートナーとなり、神の御栄光のために生きる、有意義な人生となることが出来る、と言うことが出来るのです。

次に、教会形成（第二節）と伝道（第三節、第四節）について、具体的に考えてみましょう。

第二節　キリストのみ体なる教会を建てる

主は言われました。「まことの礼拝をする者たちが、霊と真理をもって父を礼拝する時が来る。今がその時である。なぜなら、父はこのように礼拝する者を求めておられるからだ」（ヨハネによる福音書四章二三節）、と。ここには、父なる神が礼拝する者たちを求めておられる、との主の御言葉が記されています。

わたしたちはまず、この御言葉が主イエスの測り知れない憐れみから出たものであることに、目を留めたいと思います。なぜなら、わたしたちが神をあがめ、その御名を誉めたたえている状態は、完全な意味では、この世においては存在し得ず、ただ永遠の御国においてのみ存在します。それは、最初から最後まで、わたしたちの罪の肉が滅ぼされた後、神から与えられる究極の喜びであり、浄福だからです（コリントの信徒への手紙一、一五章五〇節以下参照）。

しかし、憐れみに富み給う神は、この永遠の命の片鱗をこの地上において、「礼拝」という形でわたしたちにも与え、わたしたちの魂のかわきをいやそうとされるのです。そのために、わたしたちを礼拝にお招きになるのです。なぜなら、わたしたちはこの世において、すでに永遠の命を必要とし、わたしたちの魂はそれなしには片時も生きることが出来ないからです。

主はそのために、神を礼拝する「神の民」をお造りになりました。「神の民」とは、天に国籍を持つ者のことです。すでに旧約において、神はモーセをとおして、御自分を礼拝する民をお選びになりました。出エジプトの目的は、「わたしのために祭りを行わせる」（出エジプト記五章一節）ためです。すなわち、神が「祝福の源」（創世記一二章二節）として選ばれたアブラハムとその子孫であるイスラエルが、古い「神の民」、旧約の民です（キリストの体なる教会は、「新約の民」、「新しい神の民」と呼ばれます。両者を併せて「神の民」です）。神は彼らが神を礼拝するために「出エジプト」の恵みを与え、更に、神

の民が守るべき「十戒」を与えられました。

十戒の最初の板には、御承知のように、神を神とすること、神を正しく礼拝すること、神の御名を正しく呼ぶこと（御心にかなう祈りをすること）、そして、安息日を聖なる日として守ることが記されています。二番目の板に記されていること（父と母を敬うこと、隣人の命を尊重すること、結婚生活を聖とすること、隣人に与えられた富を尊重すること、語る言葉が真実で公正であること、あらゆる貪欲を謹むこと）も、神によって聖とされ、神のパートナーとして生きるわたしたちが、この地上の生活においてどうあるべきかを教えています。すなわち、最初の板に書かれている四つの戒めを守るためのものとして、二番目の板に書かれた六つの戒めが理解され得るのです。

この十戒の中で、特に第四戒の「安息日を覚えてこれを聖とせよ」という戒めに注目したいと思います。なぜなら、この戒めは、神御自身がわたしたちのために礼拝の時間をお持ちになって下さる故に、わたしたちの方でも、神のために時間を作りなさい、と教えているからです。礼拝は神との交わりであり、交わりのためには、お互いがお互いのために時間をさき、それを共有する必要があります。神がわたしたちのために時間をさいて下さるということは、神の測り知れない憐れみとへり下り以外の何ものでもありません。「安息日」を意味する「シャバット」（英語のSabbath）というヘブル語は、元来「中断する」という言葉から出たものです。わたしたちが働いているときであれ、休んでいるときであれ、その他どんなことをしているときであれ、一旦その業を中断して神を礼拝することが、ここで求められています。すなわち、職業生活の中断、家庭生活の中断、市民生活の中断、プライベートな生活の中断が求められています。七日に一日、礼拝のための十分な時間を取ることは、わたしたち人間の生き物としての生物学的リズムでもあり、わたしたちのからだの細胞一つ一つに深く刻印された生命体のリズムそのものでもあるので（創世記二章三節参照）、わたしたちがこのリズムを勝手に崩したり乱したりすると、必ず心身の健康を損なうことになるのです。もちろん、霊的生命が枯渇し、生きる喜びや意欲が失われてしまうことは、当然です。わたしたちはこの世では旅人であり、寄留者です。国籍は天にあるのです。万難を排してでも礼拝を守る、という心掛けが大切であります。

さて、わたしたちが神を礼拝することは、密室や自分の家で祈ることとは違い、交わりの中で為される行為です。すなわち、共同体、「神の民」として為される行為です。それは、天国において完成される神の国の礼拝が、やはり「神の民」としての共同体によって

為されるからです。地上におけるわたしたちの礼拝は、この天国における礼拝の雛形（模型）である、と言えましょう。その意味においては、それはあらゆる意味において、未完成な礼拝です。まず、わたしたちは救われておりながら、なお肉にあるものであり、罪を犯します。その意味で、未完成な礼拝です。また、「わたしには、この囲いに入っていないほかの羊」（ヨハネによる福音書一〇章一六節）もいる、と主は言われます。まだ目に見えない大勢の「神の民」が、教会の外にいるのです。主はパウロに、「この町には、わたしの民が大勢いる」と語られました（使徒言行録一八章一〇節）。その意味でも、未完成な礼拝です。ですから、わたしたちは礼拝共同体を形成し、終わりの日を待ち望みながら、福音を宣べ伝える使命をも主からいただいているのです。このように、わたしたちの礼拝はあらゆる意味において未完成な、貧しい礼拝であり、「旅人の礼拝」です。

とは言え、わたしたちはこの未完成な礼拝において、確かに永遠の命そのものの片鱗に与かることが許されています。それ以上ではありませんが、決してそれ以下でもありません。このような確信を持つことが、大切であると思います。わたしたちは、この教会の礼拝において、まさに永遠の命そのものの片鱗に与り、天国の前味を味わうことが許されているのです。

その意味で、礼拝には自ずと中心とクライマックスがあります。「礼拝説教」と「聖礼典」がそれです。宗教改革者たちは、教会とは、説教と聖礼典が正しく行われているところだ、と教えました。この教会についての考え方は、わたしたちのプロテスタント教会において最も基本的なものです。礼拝は「招詞」「讃美歌」に始まり、「罪の赦しの祈願」「罪の赦しの宣言」などを経て、最初のクライマックスが、「聖書朗読」「讃美歌」「説教」の一群によって形成されます。そして、「讃美歌」が歌われて、いよいよ第二のクライマックスである「聖餐式」が行われ、そのあとで「献身」を意味する「献金」、「頌栄」、この世の旅路への派遣でもある「祝祷」、そして「後奏」をもって静かに終わるのです。

礼拝における説教と聖礼典との関係は、創世記二八章に書かれている「ヤコブの階段（梯子）」の話が、よくそれを示していると言えましょう。御承知のように、ヤコブがベテルの荒野で石を枕にして天涯孤独の身を地面に横たえて寝たとき、主が夢の中で彼に現れ、その先端が天にまで達する階段が天から降ってきました。この天にまで達する階段が、聖礼典に相当すると言えます。恐らく冷たい石で出来た階段などではなく、七色の光で造られていて、夜空に美しい光を放っていたことでありましょう。その最上階は神の住まいとされます。一番下は地上の世界に接していて、そこに門が開いて下界と通じていま

す。ヤコブはいわば、天と地が一つに繋がっている、極めて荘厳な情景を示されたのです。無言の静けさの内に、主のみ使いがしきりに上り下りしています（ヨハネによる福音書一章五一節参照）。主はその不思議な階段を示しながら、彼に語られました。

「わたしはあなたと共にいる」

この「わたしはあなたと共にいる」という言葉が、礼拝説教に相当します。

ヤコブはこの時、単に言葉で「わたしはあなたと共にいる」と語られただけでなく、そのことを同時にあの不思議な階段のイメージでお示しいただいたことによって、この出来事がいつまでも確かで、一生涯忘れ得ないものとなったに違いありません。そのように、わたしたちが聖礼典において示されるものを信仰をもって受け取るときには、それは永遠の命そのものを頂く出来事にも匹敵する、と言って少しも過言ではないのです。

ですから、洗礼も聖餐も、ただ信仰によってしか、その意味を理解することも、受け取ることも出来ません。洗礼には試問会があって、聖礼典の意味に関しても、教会と志願者とが十分に理解を共有する場となります。そして、聖餐は、洗礼を受けた者だけが、与るものです。いわゆる「未受洗者の陪餐」はあり得ません。それは、聖礼典が意味を失わないためであり、決して差別ではありません。

第三節　伝道につかわされる教会

次にわたしたちは、教会が福音伝道のためにこの世につかわされていることについて、考えてみたいと思います。

伝道は教会の維持発展という自己目的のために為されるものではありません。むしろ、この光栄ある務めの出発点となるのは、やはり主の御言葉です。主は「あなたがたは行って、すべての民をわたしの弟子にしなさい。彼らに父と子と聖霊の名によって洗礼を授け、あなたがたに命じておいたことをすべて守るように教えなさい」（マタイによる福音書二八章一九～二〇節）とお命じになりました。

この伝道命令もまた、礼拝への招きと同様、主の憐れみ深い御心から出ている御言葉です。なぜなら、主は単にわたしたちキリスト者だけでなく、この世の人々も、この世においてすでに永遠の命を必要とし、それなしには本来片時も生きながらえないことをご存じであられ、彼らをも憐れみ、御許にお招き下さるからです。

Ａ　ところで、伝道について考えるとき、第一に大切なことは、伝道の究極の主体は神であられる、ということです。教会はこの神のパートナーとして選ばれておりますが、本来の、究極の主体は、教会を永遠の昔からその御計画の中で選ばれた、永遠の神なのです。

そこでわたしたちは、神の「永遠の選び」（恵みの選び）について考えてみる必要があります。なぜなら、そうすることによって初めて、わたしたちもまた神の確固たる福音伝道の御意志を知ることが出来、「恐れるな。語り続けよ。黙っているな・・・この町には、わたしの民が大勢いる」（使徒言行録一八章一〇節）という御言葉を聴くことが出来るからです。伝道者が、どんな時にも失望せず、熱心に、根気強く、あらゆる艱難にもめげずに喜んで福音を語り続けることが出来るのは、決して伝道者自身の熱心さや情熱によるのではありません。神の恵みの選びについての正しい信仰に立った召命によってなのです。実際パウロは、コリントの町で右の言葉を幻の中で聴き、一年半の間そこに腰を落ち着けて伝道することが出来ました。そのようにして、コリントの教会が建てられたのです。

では、選びの信仰とは、どのようなものなのでしょうか。エフェソの信徒への手紙一章四節以下には、次のように書いてあります。

「天地創造の前に、神はわたしたちを愛して、御自分の前で聖なる者、汚れのない

者にしようと、キリストにおいてお選びになりました。イエス・キリストによって神の子にしようと、御心のままに前もってお定めになったのです」

つまり、永遠の選びとは、天地創造以前の、永遠の昔からの神の選びのことです。カルヴァンはこのことを説明して、父なる神のところには「天国の登録台帳」（または「命の書」、出エジプト記三二章三二節、ヨハネの黙示録二〇章一二節など）がある、と言いました。この「登録台帳」には、わたしたち一人一人の名前がすでに永遠の昔から記入され、登録されているのです。神は永遠の昔からわたしたち一人一人を愛し、時いたってわたしたちを土の塵から造ってこの世に生まれさせ、愛の中にはぐくみ、イエス・キリストのみ体なる教会へと招いて信仰をお与えくださいました。ですから主は、「あなたがたがわたしを選んだのではない。わたしがあなたがたを選んだ」（ヨハネによる福音書一五章一六節）と言われたのです。わたしたちが善良で立派な人間で、心も清く、神をひたすら求める人であったから教会に来て、主と出会うことが出来たのではありません。

このような聖書の予定論は、「神の恵みの選び」と呼ばれます。多くの人が忌み嫌い、反発するカルヴァンのいわゆる「二重予定説」とは違うものです。聖書には「二重予定説」はどこにも主張されていません。聖書の中には、いわゆる「万人救済説」も説かれて

いないかわりに、二重予定説も説かれていません。「永遠の滅びへの予定」について、新約の中で明確に語られている箇所は皆無ではありませんが、僅か数カ所です。聖書は「選ばれた人が居るなら、当然捨てられた人もいる筈だ」、というようなわたしたちの形式論理には囚われていないのです。ちなみに、ヨハネの黙示録七章四節で十四万四千人の人だけしか救われない、と述べられているのは、十二という完全数の十二倍の更に千倍（これも完全数）の数の人々、すなわち、神から御覧になって完全であるような数の「神の民」が救われる（また、それまでは歴史は終わらない）、と言われているだけです。神がお与えになる信仰は、わたしたちが自分自身の永遠の救いに関しても、完全に神に委ねることが出来るようにさせてくれるものです。

別の言い方をすれば、聖書が語っている永遠の選びは、救いに入れられた者自身が、自分の救いはおよそ一切のおのれの業によるものではなく、おのれの業としての信仰によるものでさえなく、ひとえに神の恵みの選びによるのである、という信仰の表白なのです（エフェソの信徒への手紙二章五節参照）。したがってそれは、「ただ信仰のみによる義認」というパウロの信仰義認論を徹底させた時に、必然的に行き着く結論である、と言えます。それによって、わたしたちが決してファリサイ的な自己義認に陥ることなく、むしろ

反対に、たといどのような人であれ、その人の外見や外から見た行状とはかかわりなく、福音伝道の対象であることがあきらかになるためです。「実に、すべての人々に救いをもたらす神の恵みが現れました」（テトスへの手紙二章一一節）「神は、すべての人々が救われて真理を知るようになることを望んでおられます」（テモテへの手紙一、二章四節）、と書かれているとおりです。

したがって、正しく理解された聖書的な予定説は、わたしたちを強く伝道へと促すはずです。「この町には、わたしの民が大勢いる」（使徒言行録一八章一〇節）との御言葉は、そのことを語っているのではないでしょうか。実際、神の救いが神の永遠のご計画と決意の中にその確固として不動の基盤を持っているのであるなら、伝道において働いておられるのは全知全能の神であり、神は偶然によっても、人間の側の弱さや失敗によっても影響を受けずに必ずその民を集め、救いの目的を達成されるでありましょう。だとしたら、わたしたち、その御業に参与することを許された教会とキリスト者は、喜びを持ち、熱心で、諦めずに根気強く伝道することが出来るようになるのです。

なぜ「喜び」があるのかと言えば、伝道の業そのものが、すでに喜びだからです。なぜなら、それは永遠の命の喜びの伝達だからです。およそ喜びというものは、豊かに溢れ出

て外に伝達され、喜びの輪が更に広がることをますます喜ぶものです。ですから、「一人の罪人が悔い改めれば、神の天使たちの間に喜びがある」（ルカによる福音書一五章一〇節）と言われます。伝道において最も大きな恵みを受けるのは、伝道された人であるよりも、伝道する人だ、と言われるのは、このためです。

次に、なぜ「熱心」に伝道することが出来るかと言えば、伝道は主の熱心な御心を行い、御国建設の御業に共に参与することであり、「主の祈り」を祈るわたしたちは、同じ熱心さを抱いてそれに与ることが出来るからです。

次に、なぜ「諦めず」、「根気強く」伝道出来るようになるかと言えば、それは、見えない神の民が「大勢いる」と確信することが出来るからです。なぜなら、「わたしは天と地の一切の権能を授かっている」（マタイによる福音書二八章一八節）と言われる全能の主は、「世の終わりまで、いつも・・・共にいて」（同二〇節）くださいます。従って、たとい「四方から苦しめられても行き詰まらず、途方に暮れても失望せず、虐げられても見捨てられず、打ち倒されても滅ぼされ」（コリントの信徒への手紙二、四章八～九節）ません。たとい失敗した場合でも、過度に自分を責めたり諦めたり不運をかこったりする必要はありません。失敗や怠慢はすみやかに反省し、拙速を謹み、成功した時にも有頂天にならず、進退をよく弁え、長期の伝道計画を練ることが出来ます。そして、神が「天にあるものも地にあるものもキリストのもとに一つにまとめられる」（エフェソの信徒への手紙一章一〇節）日を待ち望みつつ、み業にいそしむことが出来ます。

神はわたしたちの目に虚しいと見える労苦をも、虚しくないものとして下さいます。なぜなら、すべてをお決めになっておられるのは、御自身の御子を十字架にお掛けになるほどに世を愛しておられ、世の罪に勝利された神だからです。わたしたちはただ、この神の愛と勝利を信じ、神のパートナーとして世につかわされてゆくだけなのです。

B　次にわたしたちは、神が伝道の主体であられるだけでなく、わたしたち「神の民」としての教会とそれに連なるキリスト者をそのためにおつかわしになっておられるということ、したがって、わたしたち教会とキリスト者が、厳密な意味での神のパートナーである、ということについて、一言確認しておきたいと思います。

この認識が今日特に必要であるのは、日本のみならず、世界の教会が、この点で大いに迷走し、現在も未だにその混乱が収まっているとは言えない状況にあるからです。特に、日本基督教団ではその混乱が未だに著しいようです。と言っても、ここで日本基督教団と

いう一教団について論ずるつもりは毛頭ありません。ただ、伝道について論ずるときに、主がわたしたちをこそつかわしておられるという自覚は大変大事でありますので、その点について、一言言及しておきたいと考えるのです。

一九六〇年代から、「ミッシオ・デイ」（ラテン語で、「神の伝道」という意味）の神学と呼ばれるものが唱えられるようになり、やがてこの神学は、世界教会協議会（WCC）を初め、世界中の神学と教会に相当強い影響を与えました。この神学によれば、伝道は三位一体の神御自身の固有の御業であり（上述A参照）、教会はこの神の御国建設の御業に他のこの世の諸団体・諸勢力と一致・協力することによってたずさわる、とされます。従ってその内容も、福音伝道という中心点はかえって後退し、単なる社会の正義・平和・公正・解放・人間の発展のために尽力することが宣教（伝道）である、とされてしまいました。このような考え方からは、教会の固有の業としての伝道は神がなさることなので、教会はどうでもよい、という誤解が生まれてしまいがちです。教会はむしろ、この世における他の諸団体・諸勢力と共に、世界平和や社会活動や社会奉仕の業にいそしむべきである、という結論が導き出されてしまうのです。もう少し正確な言い方をしますと、これらを含めた教会のすべての業が「宣教」と呼ばれ、今までの「福音伝道」はその「宣教」の

中の一部である、という位置づけとなってしまいます。この考え方を大幅に受け入れた結果、「伝道」をおろそかにして平和運動や社会活動（それらももちろん、大切ではありますが）という「宣教」の方にいそしみ、約半世紀も経たない内に、大いに教勢の低下と地盤沈下を来たらせた代表的な教団が、日本基督教団なのです。

この考え方が誤っているのはあきらかです。なぜなら、たしかに神の国を究極的な意味で建設しておられるのは三位一体の神であり、そこで真に主体であられるのも神です（上述A参照）。その限りにおいては、「神の伝道」の神学は正しいと言えます。しかし、御国の建設のためには、どうしても、まず御国の福音が宣べ伝えられる必要があります。そして主は、そのことのためにわたしたち教会に福音を宣べ伝えることを命ぜられたのです。なぜそのことを、まさに教会に命ぜられたのか、と言えば、福音を宣べ伝えることが出来るのは、福音によって救われ、神の憐れみを受けている教会のみだからです。「キリスト・イエスは罪人を救うために世に来られた」という言葉が真実であり、そのまま受け入れるに値するものであると本当によく知っているのは、自分が「罪人の頭」であり、だれよりも深く主からの憐れみを受けていたパウロであり、パウロに連なるわたしたちです（テモテへの手紙一、一章一五節参照）。ですから、「神はキリストによって世を御自分と

和解させ、人々の罪の責任を問うことなく、和解の言葉をわたしたちにゆだねられた」（コリントの信徒への手紙二、五章一九節）、と言われる場合、この「わたしたち」とは、今なお神に敵対している「この世」ではなく、神との和解を受けた「わたしたち」、すなわち、「教会」に他なりません。ですから、教会は、そして基本的に言って、ただ教会のみが、この世へとつかわされています。わたしたちはそれを自分たちの特権としてではなく、また、自分たちが文化的優位に立っているという間違った優越感においてでもなく、むしろ、主から与えられた光栄ある務めとして、へりくだって受け止めなければなりません。

ここで、二つの留保を述べておくことは、必要なことと思います。

第一に申し上げたいことは、教会以外にも、神のみ栄のために働く諸団体、諸勢力があることを、わたしたちは謙虚に認める必要がある、ということです。それらの諸団体・諸勢力は、神の国がどのようなものであるかの知識や、御国建設という自覚を必ずしも持たないまま、この世界の正義・平和・公正・解放・人間の発展のために力を尽しています。また、その他にも、この被造世界そのものの維持発展のために尽力している者たちは無数にいるでありましょう。教会は、それらすべての営み（これを、「被造世界の保全」という言葉で表現することが出来ます）に対して、敬意を抱くことにやぶさかであってはなりません。カルヴァンは、この「被造世界」のことを、「神の御栄光が表れるための舞台」であると規定しました。「神の御栄光が現れる」とは、キリストの十字架の愛が明らかになることです。この救いのドラマが演じられるためには、そのための「舞台」が必要です。この舞台の上で、神が御栄光を現されるのです。すなわち、主イエス・キリストの御降誕とその十字架と復活の出来事を頂点に持つ、神の救済史が成就するのです。神はそのために天地万物とその中に住む人間を創造され、その歴史を支配され、その中で人間が働くことをお命じになりました。地球温暖化を阻止することも、平和のための努力も、人類社会を少しでもよくすることも、全てこの「被造物の保全」のためです。それに対して、わたしたち「神の民」としての教会がこの世につかわされている特別の使命は、「神のパートナー」としてこの神の救済史、契約の成就を目指して働くことです。

第二に申し上げたいことは、福音伝道が教会に固有の、中心的な務めであるということは、もちろん、教会が社会的証をしなくてもよい、ということではない、ということです。教会はむしろ、神の国の福音を宣べ伝える務めを果たす限りにおいて、この世界やわたしたちの祖国日本が神の国とは似ても似つかないものとなることをただ傍観することは

しないでありましょう。むしろ、それらが神の国に似るものとなることを願い、新しい共同体となることを祈るでありましょう。そして、「御名が崇められ、御国が来、御心が行われる」ことを祈る祈りにふさわしい社会的証を果たすでありましょう。なぜなら、福音は、神がその独り子を賜るほどに〈この世〉を愛された、と語っているからです。しかし、それは教会のみがなしうる固有の業でも、教会がなすべき中心的な業でもないことはあきらかです。その意味では、それは教会にとっては、周辺的な業です。教会はむしろ、神の国が人間の力では決して到来しないことをよく知っている者として、ただキリストのみがこの世界の主であり、希望であることを世に知らせ、真摯な思いで為政者のためにとりなすことが、本来の意味での証の責任を果たすことになるでありましょう。

第四節　伝道する教会・伝道する信徒

本書もいよいよ最後の節となりました。わたしは日本基督教団の教師でありますので、ここでいささか我が教団の現状に対する憂いを独白することをお許し下さい。と言うのも、本書はこの教団に関する深い憂いから執筆されるようになったからです。その憂いとは、もう何十年の間、日本基督教団の多くの教会が「伝道をしない教会」となり、多くの牧師が「伝道をしない牧師」となり、多くの信徒が「伝道をしない信徒」となっているからです。長い間の紛争は、教団としての伝道協力体制を崩し、教団総会では奇妙にも「伝道」という言葉は長い間禁句とされてきました。その結果、伝道が少しも進展しないまま、多くの教会に著しい高齢化の波が押し寄せてきました。今や、信仰の継承がほとんどなされないまま、教会は老いの一路をたどりつつあります。しかも、多くの教会がまだあまり危機意識を持っていないか、あるいはむしろ、それを持つことを恐れてさえいるふしがあります。教会全体で力を合わせて現在の危機を乗り越えようとする意欲や体制がなかなか生まれてこないのです。これを何とかしなければなりません。

第一に求められますことは、教会全体が「伝道する教会」となる、ということであります。そのためには、牧師自身と信徒の抜本的な意識改革が必要です。牧師には、説教への傾注と信徒教育・信徒訓練が求められるでありましょう。説教のメッセージで、「あなたがたは救われた神の民である。救われているからこそ、罪に悩む。しかし、あなたがたの

罪は赦されたのだ。そして、その罪を犯す、ふさわしくないあなたがたが、この世に福音の使者としてつかわされているのだ」ということを、しっかりと語っているでしょうか。そして、「この町にはわたしの民が大勢いる」（使徒言行録一八章一〇節）、ときちんと語っているでしょうか。自分たちが救われた神の民であると語られた信徒は、自分たちが全くそれにふさわしくないことをよく知っていても、神の民にふさわしく十字架を負うことから逃げ出さないようになるでありましょう。また、自分たちの教会の周囲には見えざる神の民が大勢いる、と真剣に語られているなら、教職が信徒と危機意識を共有することは、何ら恐れる必要がなくなるでありましょう。その時には、それによって皆が奮起し、一致協力して伝道する教会を形成しよう、と願うように指導してゆくことが、教職の大切な務めとなります。その際、指導者としての教職に求められる第一の条件は、教会員に適切な夢や幻（ヴィジョン）を示すことです。「幻がなければ民は堕落する」（箴言二九章一八節。山口隆康著『伝道の幻に生きる教会の建設』、美竹文庫No.1、二四頁参照）のです。この場合の「幻」とは、やはり、「伝道の幻」でなければなりません。と申しますのも、信徒にはその他にも様々な夢や幻があり、教会形成についての理想があります。それらを綜合しながら、しかも主の御心にかなう幻を見出し、共に形成してゆくとき、そこに

その教会にとっての「伝道の幻」が生ずるようになるからです。この「伝道の幻」が生まれてくるためには、聖書をよく読み、神の救いの歴史をしっかりと把握するようになる必要があります（もちろんまた、地域の必要性もよく把握する必要があります）。そのための適切な信徒教育・信徒訓練をすることは、牧会者の大切な務めです。「聖書を読み、祈り、伝道する」とは、ペンテコステの日を迎えようとしていたエルサレム教会の一二〇名ばかりの人々が「心を合わせて熱心に祈っていた」姿でもあります（使徒言行録一章一四節）。

そのようにして、教会が「伝道する教会」となるとは、どのようなことを意味するのでしょうか。「伝道する教会」と言っても、何かいつも伝道集会ばかりをしている忙しい教会、ということではないのです。信徒がビラ配りばかりさせられる教会でもありません。むしろ、新しい人を連れてこられる教会、求道者が定着できる教会、そして、いつの日か洗礼を受ける決意にまで導かれる教会のことです。その中で、後継者が育てられてゆく教会です。そのためには、教会員が目標を目指して一致して歩み、決して我がままにならないことが必要です。みなが教会の中で自己満足を求めず、「お客さん」にならないで、むしろ、教会形成と伝道の主人公となることです。礼拝には遅刻せず、座席は前から詰めて

座り、讃美歌は大きな声で歌い、新来会者には親切で適切な配慮をする、といった初歩的なことを、きちんと訓練されたいものです。また、牧師や長老（役員）の目の届かない、欠けたところを進んで補いたいものです。献金の意義を知り、喜んで捧げるようになりたいものです。財力がなければ、よい伝道は出来ません。ここで常識的な考え方が打破されないかぎり、すべての計画がそこで頭打ちにされてしまいます。

そのようにして、心を一つにして教会を形成してゆくならば、きっとそこから次第に喜びや元気が生まれてくるでありましょう。教会の祈りが答えられる体験が積み重ねられるならば、ますます祈ることが喜びとなりましょう。そのようにして、教会は実を結ぶようになります。そのためにこそ、「聖書を読み、祈ること」が大事なのです。

次に、教会が「伝道する教会」となることは、その教会の信徒一人一人が、「伝道する信徒」となることを意味します。信徒は日常生活の「証」において、伝道をしている、と言えましょう。ここで「証」と申しますのは、必ずしも直接言葉によって福音を語ることではなく、むしろ、その生活全体を通して（その中にはもちろん、口で証をすることも含まれていますが）福音を証し、求道者を教会の礼拝へと連れてくることです。

このことについて、二〜三のことを申し述べて、本書を閉じることと致したいと思います。

一、志を立てなければ、何事も始まらない

「伝道する信徒」となるために、まず最も基本的なことは、その志を立てることです。志がなければ、何かをやり始めようとも考えませんし、どうしたら出来るかと工夫することもありません。

たしかにわたしたちには、「伝道など、わたしには出来ない」という強い苦手意識があります。「自分がキリストのことを間違って伝えてつまずきになってはいけない」、というおそれもあります。それはまた、ある意味では正常な感覚です。しかし、伝道するのはわたしたちではないのです。それに、わたしたちが伝道の志を持とうが、持つまいが、わたしたちが教会に通っている信徒である限り、生きていること自体が、すでに何らかの意味で――善くも悪くも――証をしていることになります。山の上にある町は、隠れることができません（マタイによる福音書五章一四節）。「イエスがそこにおられるのを知って、ユダヤ人の大群衆がやって来た。それはイエスだけが目当てではなく、イエスが死者の中からよみがえらせたラザロを見るためでもあった」（ヨハネによる福音書一二章九節）とありますように、人々は主イエスを見たいだけでなく、主イエスによって癒されたわたした

ちをも見たいのです。ですから、わたしたちが何も意識しなくても、わたしたち一人一人の存在と行動の全ては、聖書などまだ一度も読んだことのない普通の人々にとって、聖書に代わる「神からの手紙」として読まれているのです。世の中の人々はそれを読んで、つまり、広く言えば、全世界のキリスト者の言動を見て、狭く言えば、日本中のキリスト者の言動を見て、もっと狭く言えば、わたしたち一人一人の言動を見て、教会やキリストの救いの品定めをしています。その評価が高くなれば、教会に来る人も増えるでありましょうし、反対に低くなれば、教会は地盤沈下を来すでありましょう。この世と教会（キリスト）とを繋ぐものは、わたしたち信徒一人一人しか居ないのです。だとすると、信徒一人一人が果たすべき責任ははなはだ大きいことになります。タラントを地中に埋める信徒となってはいけません（マタイによる福音書二五章二四節以下）。

以上から明らかでありますように、わたしたちはキリストの「善い証人」となるか、「悪い証人」、つまり、キリストに反する「偽証人」となるか、どちらかでしかありません。中間はないのです。だとすれば、むしろ積極的に「善い証人」となる方が、ずっとよいのではないでしょうか。なぜなら、主はわたしたちのような「偽証人」の偽証の罪を赦して、なおわたしたちを「善い証人」に造りかえ、わたしたちがキリストの香を放つ者として生きるようにして下さっているからです。だとすれば、キリストの証し人としてお役に立ちたい、という志を立てたいものです。

二、言葉の大切さ

言葉で証することを決しておろそかには出来ません。クリスチャンの中には、口ではなく、背中で（つまり、自分の生活と行いで）伝道していると言う人もいますが、背中では実際には困難ではないでしょうか。それが伝道しないことの口実にならないことを祈ります。もちろん、家族に対して「教会に行きなさい」という言葉をただ命令のように語ったり、こちらの宗教的エゴの押しつけのように受け取られても、必ずしも伝道には結びつかないことは、そのとおりかも知れません。しかし、同じ命令でも、「起き上がり、床を担いで家に帰りなさい」（マルコによる福音書二章一一節）という主イエスのご命令や、弟子たちに対する伝道命令（マタイによる福音書二八章一九節以下）は、むしろ有り難いご命令です。その背後に福音の言葉（「子よ、あなたの罪は赦される」［マルコによる福音書二章五節］や「わたしは天と地の一切の権威を授かっている・・・わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる」［マタイによる福音書二八章一八、二〇節］）があるからです。わたしたちも、このような福音の言葉を語ることが出来ます。それは、「キリス

トは甦られた」という証の言葉です。そのとき、証の言葉は隣人にキリストを紹介する愛の言葉となるのです。

実際には、自分の背中で伝道するという人は、自分の行い以上のことは、ほとんど何も語れません。その人が元々立派な人であれば、人々の目に映るのはその人の立派さだけで、なかなかキリストを指し示すことは困難なのです。自分が生きているのはキリストの恵みの故であるということは、言葉で語らなければ誰も分かってはくれません。

特に、次の三、で申しますように、伝道とは誰かある特定の人のために祈るようになることです。もしその人のために祈っているなら、大事なときに言葉を掛けるのはむしろ自然であり、当然です。

三、具体的な対象を持つこと

志を立てるときに、ある具体的な、「どうしても伝道したい人」という具体的な対象が与えられ、その人のために祈るようになります。「下手な鉄砲でも、数打ちゃ当たる」は伝道ではありません。「あの人に福音を伝えたい」という思いを自然に抱く人は、わたしたちが接する何百人もの人々の中に、きっと一人ぐらいはいるはずです。そのひとに、一年かかってよいのです（それ以上早くは多分、無理です）、教会の礼拝にお誘いしたいと

願い、祈るのです。一年に一人お誘いできれば、わたしたちは一生の間に、随分大勢の人を教会にお誘いすることが出来ます。その中で、きっと何人かの人は、ずっと教会に留まってくれるでありましょう。

具体的なある目標となる人が居るとき、わたしたちは他者や周囲を意識して表面を飾ったり、その結果不自由な人間となることからかえって解放されます。他者に見られているという意識で縛られる必要は全くないからです。むしろ、自分は表も裏も全部見られている、と考えて、自然体で生きることが出来るのです。「表を見せ、裏を見せて散る紅葉かな」でよいのです。伝道は自分を見せることではないからです。それはむしろ、その人にキリストを紹介する愛の業です。まず、その人の真の友となることです。愛なくして、真の伝道は出来ません。その人の友となり、その人のために祈ることが、非常に大事で基本的なことです。そして、適切な働きかけを――一年掛けて――行うのです。言葉を掛け、悩みを聴き、人生の相談相手となり、ときには手紙を書き、本を差し入れるなど、手段や方法はいくらでもあります（本を差し入れたときには、ただそれだけに終わらせず、必ず感想をお聞きし、問題については話し合うことが大切です）。また、積極的にキリスト者であるあなたの証を聴きたがるときもあります。そのときには、「あなたがたの抱いてい

る希望について説明を要求する人には、いつでも弁明できるように備えていなさい。それも、穏やかに、敬意をもって、正しい良心で、弁明するようにしなさい」（ペトロの手紙一、三章一五～一六節）と教えられています。自分の入信の話が、一番よいでありましょう。そのようにして、いつの日か、その人を自分の教会の礼拝に連れてきて、一緒に座るまで、その人のために祈り続けることが大切であると思います。クリスマス礼拝、伝道礼拝、花の日の礼拝、聖徒の日礼拝など、機会はいくらでもあるはずです。

そのようにして、一生涯人の魂を追い求めることが、真のキリスト者と言えましょう。

四、すべてに時があること

最後に申し上げたいことは、すべてのことに「時」があるように、伝道にも「時」がある、ということです。伝道の中でも、家族伝道は最も難しいものと言われます。ですから、家族伝道は、一年ではできません。むしろ、一〇年、二〇年して、ようやく実を結ぶ場合もあります。しかし、わたしはいつも自分の教会員に申し上げているのですが、人間、どんなに順風満帆な人生行路を歩んでいる人でも、必ず五年や一〇年の内に一度や二度は、その人にとって「人生の危機」とも言うべき出来事に遭遇するものです。受験や事業の失敗、交通事故、病気、落第、失恋、愛する者の死、定年、その他、様々なトラブルに遭遇しては失望落胆し、立ち止まり、逡巡するのです。それはある意味では、神がその人を愛し、その人のために備えられた時であるとも言えましょう。そのような時、たとえどんな無神論者であっても、ふと自分の身近にいて、自分のために祈っていてくれる（らしい）人の信じている神とは何か、キリストとは何か、信仰とは何か、内心考えることがあるはずです。その「時」が、チャンスなのです。その「時」に、もしあなたがその愛するご家族のために祈っていたなら、あなたはこのチャンスに気が付き、それを神が備えられた目的に添って、利用することが出来ます。他にはまずチャンスはありません。しかし、このチャンスは五年や一〇年、一五年の間に、必ず何回かはやってくるはずですから、決して志を失うことなく、祈りを止めないで続けることが、大事なことなのです。

「伝道する教会」は、「伝道する信徒」が支えます。そして、「伝道する信徒」は、「伝道する教会」が支えます。そのようにして、主の福音が前進してゆきます。これほど喜ばしい、意義のある、充実した業は、他にはないのではないでしょうか。

あとがき

本書の執筆を思い立ったのは今年の春ごろでしたが、脱稿するまでにかなりの時間がかかったことには理由があります。と申しますのは、本書は草稿の段階から、多くの方々にお目を通して頂いたからです。特に、文庫制作委員として教会外からご参加頂いた、小泉健先生、近藤勝彦先生、山口隆康先生には、一方ならぬご助言やご示唆、叱咤激励のお言葉などを頂きました。その温かい、御友情に満ちたお言葉の一つ一つはこの小著を見るたびに、何時までも思い起こすことでありましょう。それらはひとえに、この小著が出来るだけ日本の教会の多くの信徒の方々にお読みいただけるよう、取っつき易く、読み易く、分かり易くするためでした。その結果、一度出来上がった草稿に更に何度も筆を入れ、「一つの石が他の石の上に残ることもない」（マルコによる福音書一三章二節）ほどとなりました。また、美竹教会の長老たちにも、息子の彰にも、意見を寄せてもらいました。そのようなわけで、本書は上田光正個人の作ではなく、大勢の者たちの合作であるとも言えます。また、財政的な面ではこの第三巻も引き続き美竹教会の会員の特別伝道献金と、諸教会から寄せられた沢山の感謝献金によって賄われています。そして最後に、この小著の意義をよく理解し、発送を一手に引き受けてくれたわたしのパートナーである照子にも、また、常に変わらない誠意をもって本作りをしてくださった、㈱カワマタ印刷工芸社の川又祥民社長にも、ひとかたならずお世話になっています。今、この場をお借りして、これらすべての方々に心からの御礼と感謝の辞を申し上げたく思います。

なお、各節の長さをそろえて読書会などでも使い易くしようと考えておりましたが、どうしても長い節がいくつか出来てしまいました。その場合には、A、Bなどと分節いたしましたので、適当にご利用頂ければ幸いです。

著者識

二〇〇八年八月

追記。本文庫に関しては、教会で有益にお使い下さる場合に限り、送料とも無料で配布させていただいております。なお、皆さまからのご献金は、今後の出版のために有益に用いさせていただきます（ご参考までに、一部の実費は三百円です）。

「美竹文庫」の発刊の辞

私たちは、「教会は『伝道する教会』とならなければならない」、という理念と主張を高く掲げて、この美竹文庫を設立する。その目的は、この理念に沿う良質な書物を集め、それらが誰にも手軽に入手できるようにして、広く世に浸透させることである。

思うに、今日における日本の教会の地盤沈下には著しいものがある。教会の高齢化と献身者の極端な減少は、すでに誰もが気が付いているであろう。小教会の統廃合の必要性は、すでに目前に迫っている。しかしそれだけではない。今日の日本におけるキリスト教は、どれだけ一般社会から尊敬を受けているであろうか。かって、キリスト教は必ずしも誰もがすすんで入信しなかったときでさえ、社会から一目置かれていた時代はあった。何か事あるときには、人々はキリスト者の意見にも耳を傾けた。国家社会の重大な危機のときには、たとい少数意見ではあっても、キリスト者の意見は必ず紹介された。しかし、今日の日本や日本社会においてはどうであろうか。たとえば憲法改正の問題について、教界内では相当に見識の高い意見が披瀝されているのに、一般社会からは必ずしもそのようには期待されず、従って注目もされていないのである。

確かに、日本のプロテスタント教会を代表する日本基督教団内の三〇年来の混乱が、今日このような事態を惹き起こしたことは否めない。しかし、更にその奥にある原因を問うならば、これらは必ずしも時代の流れから必然的に出てきたものではない。また、時が来れば自ずと神が解決してくださること、従って我々は、ただ傍観者のようにこれらを拱手して見ていればよい、ということでもない。なぜなら、このような事態に立ち至ったことに対しては、我々伝道者自身の責任が大いに問われなければならない。また、今日における教会形成のあり方が大いに問われていると考える。

教会が伝道という主イエス・キリストからの尊い、光栄ある使命を蔑ろにするや否や、たちまちそれは気の合った人々だけが集まる心地よいサークルのようになってしまう。その円滑な運営の為に、実に多大な努力とエネルギーが傾注されるが、教会内に悩みの種が尽きることはない。そして、いつの間にか教会は塩味を失った塩のような無用の長物となってしまうのである。

私たちは更に、もう一つの事実にも絶えず注意を払うことを促される。即ち、私たちの教会が「伝道する教会」となるという歩みは、各教会それぞれ別々の歩みとしては成就できず、日本基督教団全体の、ひいては、日本の教会全体の歩みとならなければならない、ということである。このことには二つの課題が含まれている。第一の課題は、日本の教会全体がもう一度、聖霊降臨によって成立した初代教会の初心に立ち帰り、信仰的・霊的に覚醒されることである。第二の課題は、各教会が各個教会主義のエゴイズムから脱却し、考え方や伝統、教派の相違をも乗り越えて、公会主義の理念を生かし、伝道においてたがいに手を取り合うことである。

これらはいずれも、達成困難な「幻」には違いない。しかし、教会は幻を見てこそ教会として歩める。日本の教会全体が「伝道する教会」となるというこの一点において、同じ方向を向くならば、私たちの息子・娘の時代に於いて、それらは単なる幻ではなくなると思うのである。

私たちはこれらのことを考え合わせて、西暦二〇〇五年の教会総会に於いて、本文庫の設立を決議した。その目的は、私たちの教会自身がますます「伝道する教会」となると同時に、日本全国の教会の兄弟姉妹が一致して「伝道する教会」を目指すようになることである。その為に、少なくとも最初の三年間は、本文庫は無料配布を行い、本教会の伝道特別献金によって経費を賄うことを決意した。

二〇〇六年四月三〇日

美竹教会牧師　上田　光正

【著者略歴】

1942年　東京生まれ。
1963年　東京大学医学部中退。
1966年　東京神学大学大学院修士課程終了。
1968年　東京大学大学院修士課程哲学科卒業。
1968年
～73年　西独留学、ゲッチンゲン大学にて神学博士号取得。
安芸教会、若草教会主任牧師を経て、
現在美竹教会主任牧師。

〈著書〉

カール・バルトの人間論 ／ 1975 ／ 日本基督教団出版局
聖書論 ／ 1992 ／ 日本基督教団出版局
信徒のための教会論入門 ／ 1998 ／ 日本伝道出版社
祈りの宝庫 ／ 2002 ／（自費）

聖書、祈り、伝道

美竹文庫 No.3

発行日　2008年 9 月20日
第 2 版　2009年 1 月30日

著　者　上　田　光　正

発行者　日本基督教団 美竹教会
牧師　上 田 光 正
〒150-0002 東京都渋谷区渋谷 1-17-17
TEL 03 (3409) 7401　FAX 03 (3498) 2941
URL http://www.mitake-ch.or.jp
郵便振替　00130-0-573594

印刷所　株式会社カワマタ印刷工芸社
〒135-0048 東京都江東区門前仲町 1-11-2
TEL. 03 (3643) 1192　FAX. 03 (3643) 1194

©Mitake Church 2008, Printed in Japan　〔非売品〕

表紙絵　ルオー、《受難》“泉の水が葦に囁くように…” 1935年
Rouault, 《PASSION》“Comme à l'herbe, l'eau de la fontaine…”